

# 宇治田原町の自然環境

協働によるふるさとの自然環境保全のための基礎資料調査

エコパートナーシップうじたわら

## 目次

はじめに・エコパートナーシップうじたわらについて	1
事業について	2
学名・分類について、凡例	4
宇治田原町について	5
生物多様性の保全について	6
宇治田原町の環境（山地・河川・森林・気象）	7
環境の変化（森林面積等の変化・気候の変化・野生動物）	9
環境を取り巻く近年の問題（ナラ枯れ、有害鳥獣、外来生物）	10
生活・文化とのかかわり	13
宇治田原町の地質（石灰岩・化石・豆石・正珪岩）	21
保全が図られている場所	24
その他特に保全を図るべき場所	25
宇治田原の自然環境と歴史・民俗、四季折々の詩歌等	29
レッドリスト・ブラックリスト	31
宇治田原町の野生生物	41
宇治田原の野生生物とともに	46
自然とふれあうために	50
編集後記	52

## はじめに

平素はエコパートナーシップうじたわらの活動にご理解・ご協力をいただきありがとうございます。ありがとうございます。

エコパートナーは年間を通じて様々な活動をしていますが、この3年間、平和堂財団の「夏原グラント」助成金を受け、町内の自然環境について調査活動を実施しました。

宇治田原町は豊かな自然環境が残されていますが、我々が感じている環境の変化は世界規模の環境の変化と連動しており、決して他人事ではないということです。

地球温暖化が進行する中、人間の英知でどこまでのことができるのか？限られたこととはいえ、地道に行動していくしかありません。温室効果ガスの削減だけではなく、現に進行している温暖化に適応する柔軟性も必要で、そのためには正しく現状を認識することが大切です。

今回の調査で得られた成果が少しでも活用され、ふるさとの貴重な財産が末永く守られることを願います。

2019年3月

エコパートナーシップうじたわら 会長 芦原 昇

## エコパートナーシップうじたわらについて

エコパートナーシップうじたわら（以下、「エコパートナー」という。）は住民・事業者・行政が協働で「宇治田原町環境保全計画」を推進するために2004（平成16）年に設立された住民団体である。「自然環境保全」「地球温暖化防止」「広報」の部会があり、113名の会員で構成される（一般会員。2019年3月現在）。運営費は町内の企業や団体等からの賛助会費で賄い、エコクッキングや自然体験ハイキング、会報の発行などを主な活動内容としている。宇治田原町役場建設事業部建設環境課が事務局をつとめ、会の運営を支援している。広報は会報誌を年5回程度発行し、役場ホームページのエコパートナーコーナーの他、2015年11月からはfacebookページを開設している。

毎年6月に総会を開催し、2か月に1回、運営委員会で活動計画等を協議している。



## 事業について

### ・経緯

この事業は公益社団法人平和堂財団から「夏原グラント」の助成金交付を受け、エコパートナーが「協働によるふるさとの自然環境保全のための基礎資料調査」として実施したものである。

宇治田原町では、2002～2004年度にかけて宇治田原野生生物研究会に委託し、緑と文化の基金補助金事業として町内の野生生物を調査した成果により「宇治田原町レッドデータブック」を発行し、町内の自然環境や野生生物の現況を明らかにした。

それからおよそ10年が経過し、町内の自然環境を取り巻く状況が変化したこと、今後とも新名神高速道路や山手線などの交通網の整備により開発が促進されることが予想されるため、生物多様性保全との調和を図るためにも、現在の町内の自然環境に関する基礎資料調査が必要であると考えた。ただし、前回の調査とは異なり、多くの時間と人員を動員することが困難であると考えられるため、今後特に保全が必要と考えられる場所を重点的に現況の確認と新たな発見を目指すこととした。

エコパートナーでは、新たな取り組みを実施するため、平和堂財団の「夏原グラント助成金」に応募した。夏原グラントは平和堂財団がNPO法人、市民活動団体、学生団体等が滋賀県内または京都府内で実施する「琵琶湖およびその流域の自然環境の保全活動」で、水質保全、森林・里山保全、水源の森保全、河川環境保全、湖岸(葦原)保全、生物多様性保全等、内容が先進的で他の団体のモデルとなる活動を支援するもので、助成を希望する団体は書類審査を経て審査員の前で活動内容についてプレゼンテーションを行い、採択された団体はNPO・市民活動団体では最大50万円(学生団体は30万円)の助成を受けることができる。エコパートナーも助成金贈呈式及び交流会において、平和堂財団の夏原平和理事長から目録を贈られた。1つの事業に関し3年間に渡り助成を受けることができるが、各年度で申請書を提出し、審査を受ける必要があり、年度ごとに実績報告を行う。助成団体の活動状況は夏原グラントのサイト及び冊子で紹介される。

### ・調査活動

エコパートナーでは、町教育委員会が主催する青少年向けの環境学習に講師を派遣しており、事業期間中は参加者の協力を得て観察された野生生物等を記録して台帳を作成し、必要に応じて標本を採取した。また、会員等からの情報により、個別に現地調査を実施した。現地調査及び記録作成、原稿執筆は以下の体制で実施した。

エコパートナーシップうじたわら 会長：芦原 昇  
副会長：阪本伊三雄（環境学習講師・現地調査）  
運営委員（現地調査・原稿作成協力）  
宇治田原町役場建設環境課（事務局、環境学習共催、資料整理、原稿作成）  
宇治田原町教育委員会（環境学習主催）

・ 事業費と夏原グラント助成金（実績及び見込み）

年度	助成金
2016（平成28）年度	100,000 円
2017（平成29）年度	50,000 円
2018（平成30）年度	250,000 円

※最終年度についてはこの原稿の作成段階では事業費が確定していないため、掲載している助成金額は交付決定を受けた額であり、最終的に変更する可能性がある。

・ 調査活動の実施

調査活動及び資料の整理はエコパートナー会員及び事務局が担当したが、現地調査の一部は宇治田原町教育委員会が主催する環境学習を兼ねており、同学習会に参加する児童及び保護者その他参加者の協力を得た。

エコパートナーでは調査への参加・協力者を募集し、幅広い参加者を得た。

毎年11月に実施している自然体験ハイキングは、宇治田原町文化協会が開催する歴史ハイキングと共催で実施している。

調査実施記録（うち環境学習実施分）

・ 2016 年度

実施日	場所	内容
7月27日	田原川（荒木）	水生生物調査
11月13日	御林山（立川）	町有林の植物・菌類
2017年1月22日	奥山田川上・宮村	地質と野鳥

・ 2017 年度

実施日	場所	内容
7月31日	田原川（荒木）	水生生物調査
11月12日	立川～湯屋谷	植物・菌類・地質
2018年3月3日	天皇谷（荒木）	植物と地質

・ 2018 年度

実施日	場所	内容
7月31日	※猛暑のため中止	
11月12日	岩山地区	植物・菌類・地質
2019年3月9日	奥山田	地質（化石）

## 学名・分類について、凡例

この報告書では、町内の環境に関する概要や調査で得られた新たな知見等を主に掲載し、調査活動中に記録した生物や地質について主なものを掲載している。2006年度版宇治田原町レッドデータブックに掲載されたもののうち現在の環境省及び京都府のレッドリストに掲載されているもの及びその後新たに掲載されているものについて、リストを掲載している。掲載している和名や学名、分類については京都府のレッドデータブック2015年度版に準じているが、その後の知見で変更が公表されているものについてはそちらを採用する場合がある。

### 凡例（生物）

和名	学名	分類			レッドデータカテゴリ	
		目	科	属	京都府RDB	環境省RDB
ホンダザル(ニホンザル亜種)	<i>Macaca fuscata fuscata</i>	サル(霊長)	オナガザル	マカク	要注目種	

人間はものを分類することを好むのか、古くから生物などを分類してきた。「分類学の父」と呼ばれるリンネ（1707～1778）は1753年に「植物の種」において生物に「属名」と「種小名」で構成される名前を与え（二名法）、それが現在も学名の基礎となっている。さらに上位の分類である「綱」や「目」を設定し、階層的な分類を行った。

生物の名前のうち「和名」とは日本国内のみで通用する名称で、命名に関して厳格なルールは存在せず、図鑑等に掲載され、一般的に呼称されているものを「標準和名」という。「学名」は国際的に共通の学術名で、動物や植物などそれぞれ国際的なルールである「命名規約」に基づいて記載されたものである。語源は主にラテン語やギリシャ語だが、日本語など他の言語や地名、人名に由来するものもある。

例を挙げれば、宇治田原町の名産品のひとつ、「マツタケ」は和名だが、学名を「*Tricholoma matsutake*」といい、「*Tricholoma*（キシメジ属）」は属名、「*matsutake*」が種小名となる。学名はこの2つで構成されるが、実際には生物群ごとの命名規約により種小名の後に命名者や記載年がつけられる。マツタケは日本人が新種記載したもので、種小名に日本での名称「*matsutake*」を用いている。

共通の特徴を持ついくつかの種のグループを「属」とし、さらにいくつかの属のグループを「科」とする。そのように分類群を下から種、属、科、目、綱、門、界の順にまとめていき、マツタケは菌界・担子菌門・ハラタケ亜門・ハラタケ綱・ハラタケ亜綱・ハラタケ目・キシメジ科・キシメジ属に分類される（各階層をさらに細分する場合がある）。

生物の分類は従来、その生物の形態的特徴から類縁関係を推測して近縁と思われるもの同士をまとめてきたが、近年はDNAの情報により従来からは想像がつかなかった生物群同士が近縁であったり、近いと思われていたものがまったく異なる分類群であることがわかるなど、大きく変更されたものも多い。また、「分類」はどこまでも人間が決めたルールによるものであるため、永遠に不変のものではない。

## 宇治田原町について

宇治田原町（うじたわらちょう）は、京都府綴喜郡（つづきぐん）に属し、京都府南部の山城地域東南部に位置する。現在の町役場付近は北緯 34° 51 分、東経 135° 51 分、標高 118mとなっている（2020 年度に移転予定）。大きさは東西に 10.9km、南北に 8.8km で総面積は 58.16k m<sup>2</sup>。全体がハート形をしている。

西は城陽市と綴喜郡井手町に、北及び東は宇治市と滋賀県大津市・甲賀市に、南は相楽郡和束町に接している。

町域のおよそ 7 割を山林が占める山間部のまちで、古くから大阪方面・奈良方面と滋賀・東海方面を結ぶ街道を人が行き来し、現在も国道 307 号などが本町と大阪府・滋賀県方面をつなぐ主要な交通路となっている。

今からおよそ 1,500 万年前の新生代第三紀中新世には地形の変化により海底に没していた時期があり、当時の海に棲息していた生物の死骸が堆積して形成された化石層が観察され、さらに古い時代の古生代の生物に由来する石灰岩が産出する地域があるなど、多様な地質がみられる。

平地の少ない町内では、集落に近い丘陵地で茶の栽培、山林から産する木材や薪炭などの商品作物を生産していた。

宇治田原町内では奥山田でのチャート製有舌先頭器や各地でサヌカイト製石器が発見されており、縄文時代には人間が生活していたと思われるが、7 世紀の白鳳時代から生活の痕跡（遺跡）が増加している。現在の城陽市方面から町内の南・郷之口あたりに入り、荒木・岩山地区から禅定寺地区を経て滋賀県大津市へ至る「田原道」が間道として整備され、都のある奈良方面と東国との往来が盛んになったと思われる。荒木地区に古代寺院「山瀧寺」が建立され、平城京で使われる須恵器が岩山地区の谷出窯跡群で焼かれるなど、奈良方面との結びつきが強かったと思われ、そうしたことが「田原天皇」や「天武天皇の煮栗焼栗」の伝承を生む背景になったと思われる。

中世以降は現在の集落に繋がる単位の村になっており、戦国大名のような強大な領主のいなかった山城地域は武家や公家、寺社領などが複雑に入り組んでいた。各村には地元の領主が戦に備えた山城を構え、荒木、南、岩山、禅定寺などにその痕跡が残されている。中でも、岩山地区の岩本城跡は戦国時代の山城の遺構がよく残されている。

1582（天正 10）年に勃発した本能寺の変では、堺に逗留していた徳川家康が上洛の途上で変の発生を知り、領国の三河へ帰還する「神君伊賀越え」のため宇治田原を経由し、地元の地侍が関与したという説がある。

江戸時代には大部分が禁裏御料（皇室領）となっていた宇治田原では永谷宗円による青製煎茶製法の発明で新たな茶の産地として発展してゆく。

1956（昭和 31）年、田原村と宇治田原村が合併し宇治田原町が誕生。山間部だが都市に近く、近年は工業団地や新興住宅地が造成され、現在も新名神高速道路の開通が控えるなど、新たな開発が促進されていくことが予想される。

## 生物多様性の保全について

1997（平成9）年に京都府で開催された「COP3（第3回地球温暖化防止京都会議）」で「京都議定書」が採択。2005（平成17）年に愛知県で「愛・地球博」が開催された時期に環境への関心がさらに高まった。町内でもそれと前後した時期に「宇治田原町レッドデータブック」の作成、エコパートナーシップうじたわらの設立など環境保全に関する取り組みが盛んとなった。

有害物質の規制など「公害」に関する取り組みはそれ以前から進められていたが、「生物多様性」や「生態系保全」が強く意識されるようになったのは近年のことだった。

生物多様性（Biodiversity）とは、生き物や生態系の豊かさを表す言葉として1985年にアメリカの生物学者W.G. ローゼンによって造られ、世界で広く使用されている。

生物多様性は「生態系の多様性」「種の多様性」「遺伝子の多様性」という3つの定義で説明される。ではなぜ、生物多様性を守ることが大事とされるのか？

地球上の生物は数十億年という長い時間をかけて進化し、多種多様な生物が様々な環境に棲息している。それらの生物は「生産者」「捕食者」「還元者」という互いに関係性を持ちながら生態系を維持している。

その中で人類は、食糧だけではなく、経済活動や文化など、様々な目的で自然の恩恵を受けてきた。動植物や菌類から病気の治療に役立つ物質が発見され、伝統行事に特定の植物が使われるなど、我々の生活は豊かな自然に支えられている。

地球上に生物が誕生してから幾度か大量絶滅の危機に瀕してきたが、温室効果ガスの排出量増加による温暖化がもたらす異常気象、森林の伐採や開発による生息地の環境変化、過剰な採集捕獲による個体数の減少など、現在は主に人間の活動が要因とされる新たな大量絶滅の時代に突入していると言われる。

1992年「生物の多様性に関する条約」が採択され、日本も署名。1995（平成7）年、日本で最初の「生物多様性国家戦略」が策定され、2008（平成20）年に公布された「生物多様性基本法」では都道府県及び市町村が生物多様性地域戦略を策定することを努力義務としている。

京都府では2018（平成30）年3月に「京都府生物多様性地域戦略」を策定。同地域戦略では生物多様性の保全が府民のくらしや文化を守る上でも重要なものであると位置付け、行動計画として、希少種の保全だけでなく、野生鳥獣害対策、資源を活用した地域振興、特定外来生物対策、自然史情報の収集と活用を図る自然史センター（仮）の設置検討などが盛り込まれている。それに先立つ2005（平成17）年に作成した「京都府レッドデータブック」を2015（平成27）年に改訂している。

宇治田原町は山間地域にあって今なお豊かな自然環境が残され、愛着を感じている住民も多いため、今後の開発促進との調和を図ることが重要となっている。2004（平成16）年には「宇治田原町環境保全計画」が策定され、2014（平成26）年からは第2期計画に移行している。同計画でも自然との触れ合い、生物多様性の保全が行動計画に盛り込まれている。



## 宇治田原町の環境

### ・山地

宇治田原町は町域のおよそ7割を山林が占めており、その山林を有する山地は、主に北側で宇治市や大津市に接する「大峰山系」と、南側で和束町に接する「鷲峰山系」に分かれている。大峰山系の北側には琵琶湖を源にする宇治川が流れ、深い峡谷を形作っている。琵琶湖から宇治市の天ヶ瀬付近に至る一帯は「琵琶湖国定公園」となっている。

鷲峰山は南山城地域の最高峰で山頂は標高682m。古くは山域一帯が「鷲峰山寺」として多数の僧坊が立ち並び、その様子が中世の絵図に描かれ、宇治田原と和束双方からの参詣道が残っている。現在も山頂付近に金胎寺があり、ハイキングをしながら自然に親しむ場となっている。毎年9月に行われる金胎寺の護摩焚きには宇治田原と和束双方から真言宗寺院の僧侶が参加している。

大峰山系は山裾の丘陵や扇状地に集落が形成され、鷲峰山系は幾筋も伸びる細長い丘陵に挟まれた谷間に形成されている。

大峰山系にある高尾（こうの）地区は、眼下に琵琶湖国定公園を望み、遠くは宇治市や京都市内まで展望できる風光明媚な地で、山の中腹に十数軒の民家による集落を形成している。近江源氏六角氏に関わる伝承を持ち、弘法大師が示した場所から湧き出たという水源が集落の維持に重要な役割を担ってきた。

### ・河川

町内には2つの山系を源にする河川が多数流れ、奥山田地区から大津市へ流れる奥山田川水系と湯屋谷地区を源とし、各方面からの河川が合流して宇治川に合流する田原川水系に大別される。普段の水量は多くないが、一定の降雨があると増水し、上流から土砂を運んでくる。昔から人々は時に洪水を発生させる河川の制御に腐心し、流路が変更されてきた痕跡が残る。1953（昭和28）年の南山城水害では甚大な被害が発生し、今なお人々の記憶に焼き付いている。

かつては生活排水が直接流入していた河川も、下水道や浄化槽の普及で水質が改善され、田原川で毎年実施されている水生生物調査でも良好な水質が維持されている指標となる生物が観察されている。町内の河川は毎年町が実施している水質調査で国の生活環境の保全に関する環境基準の類型「AA（水道1級）」から「A（水道2級）」の水質を維持している箇所が多い。

### ・森林

町域の約7割が山林の宇治田原では、さらにその約5割が人工林となっている。宇治田原ではその環境を活かして林業が盛んで、人工林内には府内でも有数の林道網が張り巡らされている。人工林の大部分はスギまたはヒノキで、植林後は木材として利用可能になるまで下草刈り、枝打ち、間伐などの手入れが必要で、数十年かけて育成しようやく出荷できるようになる。しかし、木材価格の低迷で伐採して運搬しても利益にならないことが多く、そのため手入れされず放置される人工林が見受けられる。そうした人工林は樹木が密集して林内が暗くなり、林床植物が育たず痩せて保水力が弱くなり、豪雨

などにより山崩れが発生する危険性が增大する。山林所有者が人工林の手入れに力を入れ、バイオマス燃料等木材以外の用途を模索するなどの動きはあるが、対策が及んでいない山林もある。

西日本では人の手が入らない原生林は常緑広葉樹であるシイ・カシを主体とする照葉樹林となるが、寺社の境内に保全されているものを除き、集落に近い山林はスギ・ヒノキ林や、薪炭林として造林されたコナラ・クヌギやアカマツが混じる雑木林となっており、ところが多い。昭和 30 年代にガスが普及するまで、家庭の燃料として薪や炭が用いられ、その材料となったコナラ・クヌギ林は伐採と萌芽を繰り返し、根元から分岐した樹木がみられる。そのような樹木はシイタケ栽培のほだ木にも使われ、宇治田原では原木栽培のシイタケが生産されている。

昔から人々は集落周辺の山林から材木や燃料のために樹木を切り出し、落ち葉を肥料にするため採取していた。山林からの有機物の収奪は徹底して行われたらしく、樹木の無い「はげ山」が多くなった。そうした痩せた山にいち早く侵入し生育するのがアカマツで、そのため、集落近郊の「里山」にはアカマツ林が多くなった。アカマツ林でも落ち葉を燃料などの用途に採集したためアカマツの生育に適した痩せた山が維持され、そうした環境でアカマツと共生する外生菌根菌のマツタケやホンシメジが収穫できた。宇治田原から産するマツタケも品質の良さで知られており、江戸時代、俳人で画家の与謝蕪村が宇治田原の弟子に招かれて松茸狩りに興じた。

昭和 30 年代までは各地でマツタケが豊富に産していたが、「燃料革命」で松葉を採取しなくなると、林床の腐植が増加して富栄養化したためアカマツの生育に適さなくなり、加えて松くい虫による「松枯れ」が追い打ちをかけてアカマツ林が減少し、マツタケの産出量も減少し続けている。

## ・ 気象

宇治田原は山地に囲まれた盆地であり、平地の最も低いところでも標高は 100m 台となっている。気温は近隣地域の城陽市や宇治市と比べて 1～2℃程度低く、冬季は雪が降りやすい。また、夜間の冷え込み等により霧に覆われることもある。同じ宇治田原町内でも標高の高い地域、禪定寺や湯屋谷、奥山田地区はより冷涼となる。

## 環境の変化

宇治田原町レッドデータブックが発行された2006年以降、町内では新しい道路の開通や改良、工業団地等における事業所の増加、大規模集団茶園の造成など、様々な変化が起こっている。

### ・ 森林面積等の変化

「宇治田原町統計書」によると、宇治田原町内の森林面積は2004（H16）年と比較して38ha減少（1995（H7）年比では155haの減少）。一方で宅地は5ha増加（1995年比では63ha増）。農地では田が13ha減少（1995年比では27ha減）し、逆に畑は10ha増加している（1995年比では38ha増）。

最近の森林面積の大きな変化の要因として考えられるのは、2010（H22）年に完成した郷之口の西ノ山集団茶園（畑地面積約20ha）の造成などが考えられる（1999（H11）年には緑苑坂テクノパークとニュータウン（合計で約58ha）が完成している）。最近も禅定寺地区で新規茶園造成を目的とした造成や、今後新名神高速道路や山手幹線の整備をにらんだ事業用地の確保などが計画されている。なお、住宅地や事業用地を造成する場合は一定割合で緑地を確保することとなっている。

### ・ 気候の変化

気温の推移や降水量の増減は年によって変動があり、わかりやすく数値化することは難しい面があるが、町内に在住・在勤する者の実感として、冬季の降雪量が近年は減少していると感じられる。20年ほど前は冬季に自動車の走行が困難になるほどの降雪が何度かあったものが、近年は1シーズンに1回あるかどうかとなっている（町役場付近）。

近年は世界的に温室効果ガス排出量の増加で平均気温が上昇し、夏季の高温化、冬季の寒冷化、巨大台風の増加などが懸念されているが、宇治田原町を含む山城地域でも短時間の集中的な降雨（ゲリラ豪雨）による河川の氾濫や土砂災害が発生している。

2013（H25）年の台風18号による豪雨では24時間で200mm以上の雨量を記録し、京都府・滋賀県・福井県ではじめての「特別警報」が発表され、各地で河川の氾濫や土砂災害をもたらした。

2018（H30）年の台風21号は25年ぶりに「非常に強い」勢力のまま日本に上陸して近畿地方を中心に甚大な被害をもたらした。特にその暴風により多くの樹木がなぎ倒され、南区の御栗栖神社境内の町天然記念物に指定されているスギの幹が折れてしまった。

### ・ 野生動物

自然の豊かな宇治田原には多くの野生動物が生息しており、ニホンザル、シカ、イノシシによる農作物被害に悩まされている。全国的にもシカの生息数は増加傾向で、近年はアライグマやヌートリアといった特定外来生物も増加している。

## 環境を取り巻く近年の問題

### ・ ナラ枯れ

カシノナガキクイムシ (*Platypus quercivorus*) がブナ科の樹木 (シイ・カシ・コナラ・クヌギ等) の幹に入り込んで産卵。孵化した幼虫は坑道内で成長する。飛来した成虫が持ち込んだ「ナラ菌」により樹木の細胞が死ぬと水分を運搬する導管が目詰まりを起こし、枯死してしまう。そのため、被害にあった樹木は夏場でも葉が茶色くなって枯れているのが見られる。主に西日本で被害が増加し、全国では 2010 (H22) 年の 32.5 万 m<sup>3</sup> をピークに 2017 (H29) 年は 9.3 万 m<sup>3</sup> の被害が発生している。

対策として侵入や拡散防止の樹脂の塗布やネットの巻き付け、被害木への薬剤注入、伐採した樹木の燻蒸や焼却が実施されているが被害の増加に追い付いていない。

宇治田原では集落周辺にブナ科樹林が少ないため被害状況を目にすることが少ないが、枯死した樹木から枝が落ちたり、倒壊することで近接する建造物や道路に被害が及ぶことが考えられる。さらに、枯死したブナ科樹木の根本には猛毒きのこととしてメディアに取り上げられ有名になったカエンタケ (*Trichoderma cornu-damae*) の発生が増加し、身近な自然公園などでは利用者が不用意に採取しないよう注意喚起を行っている。

### ・ 有害鳥獣

町内ではイノシシ、ニホンザル、ニホンジカによる農作物などへの被害が増加している。特にニホンジカについてはイノシシのように猟期に入っても狩猟対象にはされにくく、狩猟に従事する人も少なくなっているため狩猟圧が減少、明治に天敵であるニホンオオカミが絶滅したことも生息頭数の増加の一因と考えられ、そのため山地では林床植物が食べ尽くされて丸裸になり、さらに人里に下りてきて農作物なども食するようになってきた。しかも、ニホンジカが増加することにより、道路での自動車との接触、寄生しているヤマビルやマダニが増加して人家に近いところでも人が噛みつかれる事例が増加している。特にマダニについては噛まれることで感染症 (重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) など) になるおそれがある。

### ・ 外来生物

「外来種」とは、本来の生息地ではない場所に人為的に移された生物のことで、一般的には海外由来のものをイメージするが、国内においても本来生息していなかった地域に導入されたものも指す (国内由来の外来種)。外来生物法で規定する「外来生物」とは、明治以降に国外から移送されてきた生物と定義され、中でも生態系に大きな影響を与え、農作物への被害や病気をもたらすおそれのあるものを「特定外来生物」として現在 148 種を指定。駆除の対象となっている。近年町内だけでなく、全国各地で生息数が増加しているアライグマ、ヌートリアといった哺乳類だけでなく、オオキンケイギクなどの植物、ヒアリやクビアカツヤカミキリなどの昆虫類、魚類、軟体生物など多岐に渡る。

外来生物にはシロツメクサやアメリカザリガニなど全国的に広く定着してしまった種も多いが、それらがすべて人間生活に害を及ぼしているわけではなく、特定外来生物以外は駆除対象とはなっていない。

最近ではテレビ番組で外来種を駆除するとしてため池の水を抜くものがあるが、生き物の取り扱いが乱雑で多くを死なせてしまっているという批判がある。そもそも、そうした外来種の問題はもともと人間の行動に原因があり、観賞用や食用として国外から輸入したものを不要になったからと野外に放置するなど管理方法が悪いために野生化してしまっている。今や全国各地に拡散しているアライグマやヌートリアももとはペットや産業目的で導入されたものが野生化したもので、ブラックバスなどの魚もモラルを守らない釣り人が各地でリリースした結果、生息域を広げてしまった。

近年は経済のグローバル化や移動手段の発達で国外の生物が簡単に持ち込まれてしまう可能性が高まり、セアカゴケグモやアルゼンチンアリのようにすでに国内に定着してしまったものがある。また、最近ではヒアリが各地の港や国外からのコンテナ貨物から発見される事例が発生し、国内で定着しないよう関係者が警戒している。

このような問題は国外から日本への問題だけでなく、逆に日本の生物が海外で侵略的外来種として猛威を振るっている事例がある（クズやワカメなど）。

宇治田原町内でも工業団地を中心に多数の事業所があり、海外の貨物も多く出入りすることから、こうした問題とは無縁ではられない。

#### ・警戒を要する特定外来生物

「ヒアリ (*Solenopsis invicta*)」

もともとは南米に棲息するアリで、刺されると火傷のように痛むことから「Fire Ant」と呼ばれる。経済のグローバル化で荷物を運ぶコンテナなどに紛れて世界各地に分散し、アメリカ、オーストラリア、中国、台湾などに定着している。空き地などの地下に巣を作り、巣に触るなどすると集団で襲いかかり、その毒針で突き刺す。報道などで刺されると死んでしまう「猛毒アリ」というイメージがついてしまったが、有毒成分の9割以上が刺されると痛みや腫れをもたらすアルカロイド系の成分で、急激なアレルギー反応で命に危険が及ぶ「アナフィラキシーショック」を引き起こす成分はわずか0.1%程度にすぎない。

ヒアリの恐ろしさは毒の強さではなく、いったん国内で定着すると根絶することがほぼ不可能になってしまうことにある。アリのような社会性昆虫は女王が多数の子供を産み、そのコロニーを根絶するにはいくら働きアリを駆除しても無意味で、女王アリを駆除しなければならない。しかも、ヒアリの巣からは半径5kmもの範囲にわたって地下トンネルがあり、巣に異変を感じると女王アリは地下トンネルから逃れてしまう。むやみに巣を攻撃する事でかえって拡散を招く恐れもある。最近では国内でも「ヒアリに効く」とうたう殺虫剤が販売されているが、使用するだけで効果的に駆除できるわけではなく、ヒアリかどうかかわからないうちに在来種のアリを駆除してしまうとかえってヒアリの侵入定着を促すおそれがある。

ヒアリが定着してしまったアメリカや台湾などでは空き地や農地に足を踏み入れると刺されてしまい、農作業に従事する人が被害にあうだけでなく、屋外で気軽に花見や野外活動もできなくなるおそれがある。また、人的被害だけでなく、機械類に侵入して故障や火災の原因になるため、大きな経済的損失を与える場合もある。

ヒアリは2017年に神戸ではじめて侵入が確認された。国内への主な侵入ルートは中国

からの貨物で、以降、各地の湾港で発見され、そこから移動した貨物に紛れて内陸部でも発見されている。京都府内でも向日市内の事業所で発見された。さらに、事業貨物だけでなく、海外から直輸入した家電製品の梱包材に死骸が紛れていたこともあった。

騒がれた初期のころは環境省が「見慣れない赤いアリに注意」と広報したため、赤っぽいアリの目撃情報が行政機関に寄せられた。しかし、実際には在来のアリにも赤い種類があり、ヒアリ自身はイメージするほど赤くはない。

ヒアリかどうかを見極めるためにはその特徴を知って実物と比較する必要がある。ヒアリまたはアカカミアリとその他のアリは腹柄節や触覚の数と形などから区別できるというが、実物のアリは小さく、肉眼ではわからないため、実体顕微鏡などで観察しなければならない。代わりにスマホのカメラでマクロ撮影する方法等が紹介されているが、自分で判断できない場合は身近な行政機関や博物館に相談する方がよい。

オーストラリアでは駆除に失敗し「ギブアップ宣言」を行ったが、ニュージーランドは初期の侵入段階で市民らが協力し広範囲にわたってトラップ調査を実施した結果、駆除に成功し、定着を許していない。現在のように世界的な物流網が発達していると侵入を防ぐことは難しいが、定着させないようにできるかどうかは行政・事業者・住民の協働による地道な取り組みにかかっている。

#### 「クビアカツヤカミキリ (*Aromia bungii*)」

カミキリムシの仲間で、本来は中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾などに分布する。体長は2~3cmで全体が黒っぽくてつやがあり、前胸が赤い。頭部に体長ほどに長い触覚がある。国内では2012年に愛知県ではじめて侵入が確認され、以後、関東や徳島、大阪でも発見されている。桜や梅、桃などバラ科樹木に産卵し、幼虫は木材中で成長して2年後の初夏に成虫となる。幼虫は樹木の内部を食害するため枯死することが多く、桜並木などが被害にあうことが多い。また、被害が広がると梅や桃など作物として栽培されているものや観光地にも被害が及ぶおそれがあるため警戒されている。

このような生物が侵入した樹木は伐採してから粉碎または焼却せずに放置すると内部から成虫が出てくるため駆除にならず、その樹木を他の場所に移動させると分布域をさらに広げることにつながるおそれもある。

京都府ではヒアリやクビアカツヤカミキリ、水草のオオバナミズキンバイを対象とした「侵入特定外来生物バスターズ」事業として、市民からの情報で関係各機関が連携して対策を講じることとしている。



ヒアリ（環境省サイトより）

## 生活・文化とのかかわり

生物多様性の項目でも述べたように、人間が日本列島に暮らすようになって数万年、身近な生物を食料とし、また宗教や文化に利用して発展させてきた。それは現在にも受け継がれている。

### ・ 林業（スギ・ヒノキ）

宇治田原町域のおよそ7割を占める森林面積のうち、人工林の割合は5割以上にも達する。それに伴い林道・作業路網が整備され、府内有数の整備率を誇る。スギ(*Cryptomeria japonica*)及びヒノキ(*Chamaecyparis obtusa*)はともにヒノキ科の常緑針葉樹で、古くから建築資材として用いられた。

関西の自然林では優先する樹種ではなく、大部分は人工的に造林されたものである。スギは主に板材に、ヒノキは主に柱材に使用される。また、ヒノキの樹皮は表皮をはがして神社などの屋根を葺く「檜皮葺(ひわだぶき)」の材料となる。

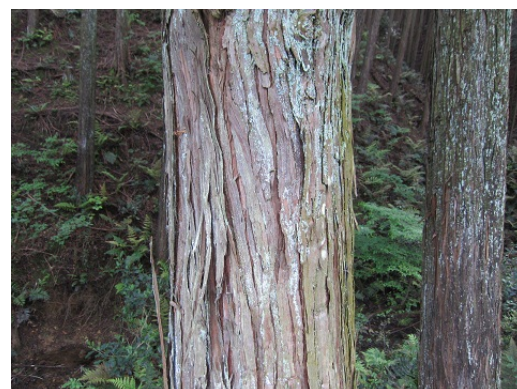
風で花粉を運び受粉する「風媒花」であるため春先に大量の花粉を飛ばし、花粉症を引き起こす主な原因の樹種になっている。

スギは水分を好むため主に谷間に、ヒノキは乾燥を好むため主に尾根筋に植林され、大部分が挿し木で増やしたクローンになる。スギは葉が尖っており、ヒノキは扁平な細かい葉が集合している。

宇治田原町史第1巻によると、和東町との境にそびえる鷲峰山に栄えた鷲峰山寺は広大な領域に58もの堂舎が存在したが、時代の変遷とともに衰退し、その跡にはスギ・ヒノキ5万本が植えられたという。



スギの樹形(左)と葉・果実(右)



ヒノキの葉(左)と樹皮(右)

第2次世界大戦の終結後、住宅復興の需要を見込んで全国各地で大量に植林されたものの、外国産材の輸入により価格が下落したため、収益を得られなくなったスギ・ヒノキ林には間伐など適切な管理が行われぬ箇所がみられ、密生し薄暗くなった人工林の下層植生が衰退したことによる表土流失の危険性などが懸念される。近年は補助金の交付と山林所有者等の取り組みで間伐等が順次実施されているが、木材としての利用は低迷している。

#### ・ 薪炭材（コナラ・クヌギなど）

西日本の原生林はシイ（ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata*)、スタジイ (*Castanopsis sieboldii*)）、アラカシ (*Quercus glauca*) などの常緑広葉樹を中心とする照葉樹林だが、人里に近く、人間の営みと密接な関わりがあった「里山」は二次林としてコナラ (*Quercus serrata*) やクヌギ (*Quercus acutissima*) が中心の雑木林となっている。いずれもブナ科の常緑又は落葉広葉樹林で、薪や炭の原料として利用されてきた。これらは昭和初期まで家庭において燃料として利用され、山林の多い地域では古くから薪や炭が現金収入を得るための商品として生産され、都市部に供給されていた。

伐採されても根元から萌芽して成長し、20～30年で再び利用できるようになる。かつて薪炭林として利用されていたコナラ・クヌギ林では、伐採を繰り返したため根元がいびつに変形し、幹が分かれたものを見ることができる。

現在では薪炭材として利用されることはほとんどないが、シイタケ (*Lentinula edodes*) などきのこの原木栽培のほだ木として使われることもある。

人の手で維持されてきた里山には明るい林床を好む下層植生があり、それらと共生又は食料とする菌類や動物などの生態系が構築されてきた。しかし、ガスや電力の普及で薪炭材の需要がなくなると放置されるようになり、巨木となったブナ科樹木に侵入したカシノナガキクイムシが持ち込む菌により枯死する「ナラ枯れ」が発生している。

昔話でおじいさんが山へ「柴刈り」に行くのは、下層植生の灌木を刈り取って燃料に使うためである。

町内の集落に近い山ではスギ・ヒノキ林の割合が高いため、隙間や人の手が入りにくい斜面などでモザイク状に分布している。



落葉樹のコナラ（左）と常緑樹のスタジイ（右）



## ・きのこ類（マツタケなど）

現在スーパーでは様々なきのこが売られているが、ほとんどが人工栽培されたものである。しかし、マツタケは人工栽培ができないため、発生期間である9～10月頃しか入荷せず、国内産はその希少性もあって高級品となっている。国内での生産量が年々減少しているため、中国やアメリカ、ヨーロッパなどからの輸入品が多く出回っている。古くから「においマツタケ、味しめじ」といわれたマツタケと並ぶきのこの雄、ホンシメジ (*Lyophyllum shimeji*) もかつては天然ものしか得られず幻のきのこであったが、近年栽培技術が開発され、スーパーでも「大黒しめじ」などの名前で売られるようになった。しかし、マツタケについてははまだ人工栽培には成功しておらず、そのため、マツタケと他のきのこを融合させた新種のきのこなどとうたう怪しげな商品まで流通している。

それほどまでに人々を魅了してやまないマツタケは古くから日本人に親しまれており、マツタケ狩りは秋の定番レジャーとなっていた。俳人・画家として活躍した与謝蕪村（1716～1784）は晩年に弟子の招きで宇治田原を訪問し、マツタケ狩りに興じたようすを「宇治行」という紀行文にしたためている。町内には当時の書簡などが残され、郷之口の妙楽寺境内には句碑が建てられている。

京都周辺はマツタケの産地として名高く、宇治田原もその品質の高さが知られていた。山林の多い宇治田原では、木材、炭、マツタケなどが都市部に出荷されていた。

昭和20年代まではマツタケも多く産したが、燃料がガス等に置き換わるのにしたが、産出量が減少している。マツタケは関西の山林では主にアカマツ (*Pinus densiflora*) と外生菌根を形成しているが、アカマツ林の荒廃とともに衰退している。アカマツは造成地など貧栄養状態の場所に先駆けて発生し、自然の状態では尾根筋などやせた場所に生えている。かつては燃料や肥料の原料として山林から落ち葉を採取し、その結果、貧栄養の状態が保たれたおかげでアカマツとマツタケの生育に適した環境が維持されていた。しかし、人々の生活環境が変化し、山林に手が入らなくなったため林内に腐植が堆積し、マツノザイセンチュウ (*Bursaphelenchus xylophilus*) による松枯れも追い打ちをかけた結果、マツタケの発生も減少の一途をたどっている。一部では荒廃したアカマツ林の環境を整備することでマツタケの増産を図る取り組みが行われているが、一度マツタケが消滅した山では環境を整備しても再びマツタケを発生させることは容易ではない。

マツタケやホンシメジといった外生菌根菌は生きた樹木と共生しているが、シイタケやエノキタケ (*Flammulina velutipe*) のような腐生菌はほだ木や人工培地があれば栽培が可能で、市販のきのこはホンシメジを除いて腐生菌である。そんな中、2018年10月に兵庫県の企業がマツタケの近縁種であるバカマツタケ (*Tricholoma bakamatsutake*) の完全人工栽培に成功したと発表、それまできのこの原型である「原基」程度しか形成できなかった室内型人工栽培で完全なきのこ（子実体）を発生させたことは、今後のマツタケの完全人工栽培の実現に一步前進したといえる。

信州や東北、関東ではマツタケ以外にもハツタケ (*Lactarius hatsudake*) やチチタケ (*Lactarius volemus*)、ハナイグチ (*Suillus grevillei*)、ウラベニホテイシメジ (*Entoloma sarcopum*) など（いずれも外生菌根菌）の天然きのこが利用されているが、

関西の人はマツタケ以外のきのこにはあまり関心がないらしい。きのこのことを「まつたけ」などと呼ぶが、他のきのこで町内の人から名前が出てくるものは「ずぼたけ（シヨウゲンジ (*Cortinarius caperatus*))」、「いくち（アマタケ (*Suillus bovinus*))」、「くろはち（クロカワ (*Boletopsis leucomelas*))」くらいである。シヨウゲンジはアカマツ林などから出るが、マツタケが出なくなってくる「くだり山」に出るという。クロカワやアマタケもアカマツ林から発生するため、マツタケの産地で認識されていてもふしぎではないきのこである。

シイタケなどのきのこ栽培では大部分が人工培地である菌床を使うことが多いが、町内ではあえてほだ木を使ってシイタケを栽培している生産者がある。



ホンシメジ栽培品（左）とマツタケ（右）



クロカワ（左）とアマタケ（右）

#### ・ 古老柿（ころがき）

カキノキ (*Diospyros kaki*) は中国原産で、果実を食用とする。「甘柿」と「渋柿」があるが、もとは渋柿しかなく、甘柿は突然変異で出現したという。また、甘柿として生食用に売られているものの大部分は渋柿を渋抜きしたものになっている。

渋柿は皮をむいて干すことでタンニンが不活化して甘みが増し、干し柿として食される。現在のように砂糖を用いた菓子が普及する前、干し柿をはじめとした果実は希少な甘みをもつもので、「菓子」とはもとは木の実を指したという。

宇治田原では「つるのこ」という長細い柿を干した「古老柿」が作られているが、禪定寺にはその発祥にまつわる伝承が残されている。

柿の未熟な果実から絞った汁を発酵させたものを「柿渋」として、様々なものに塗布

することで防腐性と防水性をもたせる塗料として生産された。また、最近では柿の絞り汁を加工した「柿酢」が商品化されている。

#### ・ 栗

栗 (*Castanea crenata*) は縄文時代から管理栽培され食料とされてきた。あく抜きの必要なカシのどんぐりやトチの実とは異なりそのままでも食用になり、味もよく栄養価も高い。山間部の宇治田原でもよく利用されていたと思われ、高品質の栽培品種が出荷されていた。「宇治拾遺物語」では、天智天皇の子である大友皇子と皇位を争い「壬申の乱」に勝利した大海人皇子（後の天武天皇）が近江から吉野に向かう道中に宇治田原に立ち寄り、村人から献じられた煮栗焼き栗を地面に埋めて戦勝を祈願したところ芽生えて成長し、立派な栗園になったという話が収録されている。南地区には「御栗栖（みくるす）神社」があり、岩山地区には「雙栗（さぐり）天神社」もある。

#### ・ ススキ（茅の輪）

ススキ (*Miscanthus sinensis*) はイネ科の多年草。「かや」とも呼ばれ、「かやぶき屋根」の屋根葺きや家畜の餌などに利用されてきた。かやぶき屋根は20~30年ごとに葺き替える必要があり、大量のススキが必要となる。ススキの生える草原は放置すると遷移して森林化していくため、ススキを確保するために集落近くに「かや場」を設けて森林化しないよう、火入れするなどして草原を維持してきた。

高原に位置する高尾集落の上にはかや場の名残である草原があり、人の手が入っていたが、カヤの需要がなくなってからは森林化が進行している。

毎年7月末に荒木地区の大宮神社で催される「夏越しの大祓式」では参道入口に大きな「茅の輪（ちのわ）」が設置され、その原料としてススキが使用されている。これをくぐり抜けることで厄を祓うとされている。



古老柿の原料「つるのこ」（左）と大宮神社の茅の輪（右）

#### ・ イネ（しめ縄）

イネ (*Oryza sativa*) は穀物として人類の主要な食糧となっている。日本では縄文時代晩期には栽培が始まっていたとされ、以来、主要な税（年貢）として納められ、日本の経済で重要な役割を果たしてきた。麦など他の穀物は植物名がそのまま食料としての名称となっているのに対し、イネの場合は「米」と呼ばれていることも、日本人の米に

対する思い入れの強さをあらわしているのかもしれない。

米には性質の異なる「うるち」と「もち」があり、うるちはご飯や酒造に、もちはおこわや餅を作るのに使われる。餅を作ることには特別な意味があることが多いようで、正月など祝い事で、または供物として作られる。寺社の催しで高台から参拝者にむけて餅などをばらまく「もちまき」が行われる。

米を生産する水田は田植えから夏場まで水がはられており、あぜなど周辺部も含めて多彩な生物が生息する場ともなっている。

イネの藁からしめ縄が作られる。正月の飾りだけでなく、神聖な場所を示したり、集落の入口にかけて厄災が入らないようにする。町内各地区には「かんじょうなわ」という行事があり、集落の決まった場所に縄をかける（樹木などに巻き付けるものもある）。中でも立川糠塚地区のものは巨大なしめ縄にシキミの枝を付け、集落総出で作り上げる。

## ・ 茶

チャ (*Camellia sinensis*) はツバキ科ツバキ属の常緑樹。中国南部付近が原産地とされるが不明。その葉を加工したものを「茶」として飲料に用いるが、東南アジアでは食用にされることもある。栽培作物として日本や中国で栽培される変種シネンシス (*C. sinensis* var. *sinensis*) とインド・スリランカで栽培される変種アッサミカ (*C. sinensis* var. *assamica*) がある。

日本にはもともと自生しておらず、大陸から導入されたとされ、国内での古い記録としては「日本後紀」に弘仁6年(815)4月、梵釈寺(現在の滋賀県大津市)の僧永忠が嵯峨天皇に茶を献じたと記されている。宇治田原への導入については、奥山田茶屋村の寄代坊の光賢が、明恵(1173~1232)の弟子の光音から茶の実を譲り受けて大福谷のあたりに植え、さらに湯屋谷の湯原寺の賢永がこれを田原郷に移したと伝承されている。

茶は商品作物として広く栽培され、中世には庶民も飲んでいたとされる。当初は茶葉をすりつぶしてといた「ひき茶」であったものが、やがて宇治で収穫前に日光を遮る「覆下栽培」を行うようになり、「抹茶」になっていったという。

抹茶は春先に摘み取った新芽を蒸してから乾燥させる「てん茶」を粉末に加工し、古い葉や茎は刈り取ったものを干してあぶり、煮出して飲用する。現在も春の新芽の発芽を促進するためや秋に大きくなった葉を刈り取ってあぶる「番茶(京番茶)」が作られている。

中国から黄檗宗を伝えた隠元(1592~1673)は中国の先端文化をもたらし、その中に「煎茶」も含まれていた。江戸時代、煎茶は文人たちの間で流行し、その需要の高まりを受けて煎茶が製造されていく。湯屋谷の永谷宗円(1681~1778)は煎茶の製法を改良し、それを江戸の商人山本嘉兵衛(山本山)が販売したことで普及したといわれる。それにより、摘み取った新芽を蒸してもみながら乾燥させる宇治製法は現在の煎茶製法のスタンダードになったという。

山林を歩くとチャノキを見かけることがあるが、近くに集落や茶畑があった痕跡やそこから逸出したものと考えられる。

## ・ 竹（縁たたき、竹林の拡大）

広義の「タケ」は若芽を「タケノコ」として食するモウソウチク (*Phyllostachys heterocycla*) やマダケ (*P. bambusoides*)、ハチク (クロチク変種) (*P. nigra* var. *henonis*) など一般的に「竹」と呼ばれ竹林を形成するものから、林床に生えるクマザサ (*Sasa veitchii*) など「笹」と呼ばれるものまで多種多様なものが分布している。

モウソウチクは4～5月に、ハチクやマダケは6～7月にタケノコを採取する。竹類は地下茎を広げて他の樹木が優先する森林に侵入して勢力を拡大していく。京都府の乙訓から山城地域にかけては竹林が多く、タケノコの産地として知られている。作物としてタケノコを収穫する竹林は竹の本数を適度に間引き、土を柔らかいものに入れ替えるなど手を入れて整備しているが、放置された竹林は密度が高くなって薄暗くなり、他の下層植生もほとんどなくなり、表土が流出しやすくなる。山城地域の丘陵部では放置竹林が拡大している。

竹は身の回りの物を作る材料として重宝され、加工してカゴなど様々なものを造りだし、節を抜いてパイプがわりにもされた。需要が高いため材料としての竹を採取することが職業となり、「かぐや姫」の「竹取の翁」もそうした職業の人物だったのではないか。

高尾地区では毎年1月14日に「縁たたき」という行事が行われる。地域の寺に集まった男衆が無言のまま縁側を青竹が割れるまで叩き続ける。まつられた十一面観音を喜ばすための荒行だという。

むかしは竹で作られていた製品も現在ではプラスチックや金属に置き換わり、利用されることが少なくなったことも竹林の放置や拡大の原因と思われる。

## ・ うなぎ（大滝）

ニホンウナギ (*Anguilla japonica*) はグアム島やマリアナ諸島付近で産卵し、成長しながら海流に乗って日本列島にたどり着き、河川をさかのぼって成長する。

かつては各地の河川や湖に棲息し、川魚のひとつとして親しまれていた。河川の整備で海と行き来できなくなり、琵琶湖などでは稚魚を放流している。

湯屋谷地区ではうなぎにまつわる風習・文化がある。田原川の源流部であり、町内最大の滝である「大滝」では、毎年9月1日に「大瀧祭」が催され、酒を飲ませたうなぎを滝つぼに放流することで雨乞いの神事を行う。また、土用の丑のころ（7月下旬）に一週間ほどきれいな水で飼育したうなぎをさばいて炭火で焼き、しょうゆ、酒、みりんで作ったたれをつけてさらに焼き上げ、茶碗の底に焼いた切り身を入れてご飯を乗せて、煎茶をかけた郷土料理「うなぎ茶漬け」が食されていた。

なお、よく知られた話として「土用の丑の日ほうなぎ」というキャッチフレーズを考案したのは江戸時代の博物学者・平賀源内といわれるが、これは、本来旬ではない夏場に売れないうなぎの販売を促進するために考案されたものであるという。

うなぎの「養殖」は捕獲した稚魚（シラスウナギ）を飼育したもので、卵からの完全養殖は商業ベースでは成功していない。そのため、近年は稚魚の乱獲による生息数の減少が懸念されており、国際自然保護連合（IUCN）では、2014年から絶滅危惧種（EN）に指定している。国内では、2013年に環境省のレッドリストで絶滅危惧IB類となっているほか、都道府県レベルでは長野県で絶滅種とされている。

2017年12月に宮崎県で解禁されたシラスウナギ漁では15日間の漁獲量が前年のわずか0.6%と統計を取り始めた1994年以降では2番目の少なさとなっている。

飲食店や量販店では毎年7月下旬にうなぎの販売促進が行われているが、過度な販売競争が大量仕入れ、売れ残り商品の大量破棄など、食品ロスを生むもとになっているだけでなく、乱獲による絶滅が懸念されている。養殖に使用される稚魚は反社会勢力による密漁・密輸の温床にもなっているとされ、資源保護のため、伝統的な食文化を後世に残すためにも見直すべきである。

・ 神事や行事に使用する植物（サカキ、ヒサカキ、ウラジロ、ヒイラギ）

サカキ (*Cleyera japonica*) とヒサカキ (*Eurya japonica*) は神社における神事や神棚のお供えとして使われる常緑広葉樹。町内ではスギ・ヒノキ林の林床にもよく見られる。

サカキは「榊」と書くように、神事には欠かせない樹木となっている。葉は青々としてつやがあり、葉の縁に鋸歯はない。ヒサカキは葉が小型で縁に鋸歯があり、サカキよりも光沢が強い。4月くらいに白っぽい壺型の花を多数枝に付け、そこからガスのような臭いが漂うため、ガス漏れなどと間違われることもある。サカキがない関東以北では同様に利用されるが、宇治田原でも「ビシャコ」と呼ばれ神仏どちらにも使えるとされる。そうした樹木の枝葉も「花」としてお供え用に販売されている。

正月のしめ飾りや鏡餅にはシダの一種ウラジロ (*Gleichenia japonica*) が使われる。林床や林道沿いに群生し、地面が見えないほどに込み合っている。葉の表は緑でつやがあり、裏面は白っぽいのが和名の由来。正月飾りの他にマツタケなどを運ぶ際の敷物などにも使われる。

ヒイラギ (*Osmanthus heterophyllus*) の葉は堅くて光沢があり、縁は粗い鋸歯状で先端がとげ状になっている。その葉が邪気を防ぐとして、節分にはその枝に同じく臭いで鬼を防ぐイワシの頭を刺して玄関口に飾られる。



サカキ (左)  
ヒサカキ (右)



ヒイラギ (左)  
ウラジロ (右)

## 宇治田原町の地質

宇治田原では数億年前の古生代から数万年前の新生代まで様々な年代の地質を見ることができる。中でも、新生代第三期中新世（約 1,500 万年前）の「綴喜層群」は、様々な化石が見られる地層として知られている。

### ・ 石灰岩

石灰岩は古生代の地層から産出し、微小な生物の死骸が堆積して形成された。酸性の水などで溶け出すため、地下の地層に空洞が生じて鍾乳洞になったり、地上の巨岩が削られて奇抜な景観を産み出している。鉱業的に採掘され、現在は主にセメントの原料として利用されている。現在のようなコンクリートが使用される前の時代でも、石灰で砂粒などを固めた漆喰が壁や塀、土間などに使われた。

宇治田原では主に奥山田地域で産出し、石を積んだ窯に採掘した石灰岩と木炭を交互に詰めて焼き、石灰を生産していた。今でも奥山田の直谷（すぐだに）と畑谷には石積み窯の跡が残っている。生産された石灰は田畑の土壌改良に使われたという。

直谷の窯跡付近には谷川の中に石で囲んだ小さな丘があり、そこに「青春（あおはる）明神」などと刻まれた石碑が設置されているが、そこを「灰屋明神」ともいう。

### ・ 化石

湯屋谷（ゆやだに）と奥山田地域には、中生代の地層「綴喜層群」が露出している場所がある。今からおよそ 1,500 万年前は海の底だった場所で、地殻の隆起により深さが変化したことが地層から見てとれる。泥岩層は水流の少ない深いところで堆積した泥で形成され、小石の混じる砂岩層は水流の早い浅い場所で形成された。そして、その時代に周辺で生息していた生物の死骸が化石となって残り、当時の環境を知ることができる資料となっている。

化石には植物の葉もあるが、圧倒的に多いのが貝の化石で、二枚貝や巻き貝があり、現在も生息している種類もあれば、化石でしか知ることができないものもある。

化石が産する地層には「宮村砂岩層」など湯屋谷・奥山田地域の地名がつけられ、そこから産する貝化石もミヤムラアサリなど和名や学名に地元の地名が取り入れられている。

2014 年、日本地質学会が都道府県ごとに代表的な鉱物・岩石を「県の石」として選定し、京都府では亀岡市の桜石（堇青石仮晶）、京都市の鳴滝砥石（珪質粘土岩）とともに、宇治田原の貝化石が京都府の石に選ばれた。

宇治田原は府内でも有数の化石観察の好適地として知られ、多くの人が見学に訪れる一方、道路沿いの地層が削り取られた結果落石が発生するなど危険な状況が発生したため露出している地層が封鎖されるなど化石が含まれる地層を間近で観察できる機会は減少している。そうした中、奥山田地域における国道 307 号バイパス建設工事では掘削工事で化石を含む地層が新たに露出し、その中から 2015 年、イルカの骨格化石が発見された。化石は京都大学付属総合博物館に収蔵され、展示や専門家による町内への出前授業など、子ども達の学習に活用されている。

宇治田原の化石について知ることができる施設として、宇治田原町総合文化センター3階には化石の資料展示が行われ、パネルによる解説、化石の実物標本の展示を見ることができる。また、2019年に「奥山田ふれあい交流館(旧奥山田小学校)」に隣接して「化石公園」が整備され、化石の掘削体験ができるようになっている。

#### ・ 豆石（黒豆石）

主に湯屋谷や奥山田地区で見られる黒くて丸いつやのある小石。岩石としてはチャートであり、古代の放散虫の死骸が堆積してケイ酸質の殻が変化したもので、ち密で硬い。湯屋谷には絵図に描かれた道として「黒豆坂」「碁石坂」という場所があり、この小石がよくみられることにちなんだ可能性もある。実際、工業団地の背後の高台「中畑」から湯屋谷の西谷・中谷集落に降りる黒豆坂でよくみられる。

この石の出所は貝化石などを含む第三紀の地層で、化石とともに砂岩中に含まれている。これはこの地域の水深が浅く、水の流れが速かった時期に堆積したものであり、浅い海または湖に生息していた貝などの化石が見られる。

地元でも「豆石」と呼ぶ人がおり、転石を集めて盆栽に使うこともあるという。

#### ・ 正珪岩

角の取れた丸い石で表面は平滑、灰色～淡黄褐色をしている。硬く、細かい石英の粒が集合してできている。隣の城陽市や大阪吹田市などでも見つかっているが、町内では湯屋谷と奥山田の間の「大福谷」で見ることができる。

岩石自体の年代はおよそ6億年前という非常に古いものだが、それよりもはるかに新しい年代の地層「大阪層群」に礫として含まれている。

この石を構成している石英の粒が中国の砂漠にある砂粒と同じであるということが、日本列島の成り立ちとともに、この石の来歴のふしぎさを物語っている。



貝化石（左）と豆石（右）



## ・マンガン採掘跡

町内の山林にはいくつか、坑道のようなものが見られる場所がある。天然の洞窟にしては奇妙だと思っていたが、聞くところでは戦時中にマンガンを採掘した坑道の跡なのだという。マンガンは軍需用鉄製品や電池の製造に欠かせない物質で、大規模な鉱山として知られていたのは丹波のマンガン鉱山である。物資が不足する中、できるだけ資源を確保しようと各地で採掘が試みられたようだが、坑道跡の規模から大きな成果を得られなかったと思われる。

町内でも荒木天皇谷、御林山山頂付近、鷲峰山、南滝の口方面で痕跡が残されているが、天皇谷の坑道跡はコウモリの巣にもなっていたようで、そういう歴史を知らなければ、単なる洞窟としか認識されないだろう。



豆石と貝化石を含む地層（左）と正珪岩（右）



直谷の青春明神

## 保全が図られている場所等

### ・ 国定公園

宇治田原町の一角には「琵琶湖国定公園」になっている箇所がある。同国定公園は国内ではじめて指定された国定公園で、琵琶湖とその周辺の山系や河川を含む広大な範囲に及ぶ。京都府内でも琵琶湖から流れ出した瀬田川（宇治川）が形成した峡谷が指定されており、その一部に宇治田原町の禅定寺及び高尾地区が含まれている。

田原川が宇治川と合流し、宇治橋方面に至るまでは急流で、両岸は切り立った山地のため人や荷物が通行するのが困難な状況だった。そこに宇治田原の奥田治作が私財を投じて難工事の末、「宇治道」を開通させた。現在は天ヶ瀬ダム completion で水位が上昇し、かつての道の痕跡はわかりにくいだが、現在の道路沿いに奥田治作の業績を顕彰する「直路碑」が建立されている。

### ・ 歴史的な自然環境保全地区

京都府が「環境を守り育てる条例」に基づき、自然環境が歴史的遺産と一体になって優れた歴史的風土を形成している地域を「京都府歴史的な自然環境保全地域」に指定し、宇治田原では禅定寺境内背後の山が指定されている。

禅定寺は奈良東大寺の別当・平崇が平安時代中期に建立し、藤原摂関家の庇護を受け広大な寺領を有していた。中世以降は衰退したものの、江戸時代前期に加賀から招かれた月舟が曹洞宗寺院として再興し、現在に至る。

現在は山のふもとに寺院があるが、かつては山岳寺院的性格が強かったらしく、背後の山には関連する施設があったと思われる複数の平坦地が残る。

歴史的な自然環境保全地区は京都府から委嘱された自然環境保全指導員が巡回して現況を報告し、保全のために活動している。

### ・ 京都の自然 200 選

京都府で「京都府緑と文化の基金」を活用し、府内に所在する優れた自然環境を紹介し、その自然環境の保全について、府民の関心を高めるため 202 点が選定された。

宇治田原町内では「禅定寺の常緑・落葉広葉樹混交林」、「ゲンジボタルの生息する田原川」、「宇治田原の貝化石層」と前述の禅定寺歴史的な自然環境保全地区が選定されている。

### ・ 天然記念物

京都府は「特に地域を定めない」天然記念物としてアベサンショウウオ、ハッチョウトンボ、ギフチョウ、オヤニラミ、アユカケを指定している。

町内では「清水家のカヤ」と「御栗栖神社の大杉」が町の文化財（天然記念物）に指定されている。

### ・ 宇治田原町の花、鳥、木

宇治田原町はサザンカ、メジロ、チャをそれぞれ指定している。

## その他特に保全を図るべき場所

### ・御林山（ごりんさん）

立川地区の南側にあり、高い山ではないが、独立した山系になっている。

大部分が町有林になっており、その歴史は江戸時代以前にさかのぼる。宇治田原の大部分が禁裏御料地（皇室領）だったころ、この山からマツタケや栗を献上し、大嘗祭用の用材を切り出した。また、「入会林」として雑税を納め、柴落葉・下草などを採取した。

明治になって許可を得て林産物を採取した時期もあったが、官有地として没収されると生活に支障を来すとして払い下げ運動が行われた。官没共有林の払い下げが実現したのは1901（明治36）年のことであり、現在は町有林として管理されている。町有林では計画的な造林を行い、木材に利用するべくスギやヒノキが育樹されている。山頂付近の一角では、「京都モデルフォレスト協会」の仲立ちで民間企業が資金を提供し管理されている。

この山はかつて「日本岳（ひのもとだけ）」と呼ばれていた時期があるらしく、宇治田原を描いた中世の絵図にはその名称とともに山頂付近に「日本大明神」や「熊蔵院」が描かれ、鷲峰山の奥の院とされたという。現在その痕跡は残されていないが、山頂から少し下ったところに「熊蔵神社」があり、その境内には経典を収めた「経塚」の石櫃とされるものが置かれている。

御林山の大部分はスギ・ヒノキの人工林が占めているが、林道沿いや一部にかつての入会林のころの名残と思われる雑木林が残っている。山頂付近は京都府の治山事業で「ふるさとの森」が整備され、遊歩道や樹木の銘板などが設置されたが、付近の植生にはない樹木が植えられたものの枯れてしまったり、遊歩道設備が木々に埋もれるなど、その面影はあまりない。

山の大部分が町有林であるため無茶な開発が行われる可能性は低いですが、今後もふるさとの山として、大切に保全されることを願う。



御林山の熊蔵神社（左）と整備された町有林（右）

## ・ 龍王の滝周辺

南地区の最も奥にあり、符作（ふづくり）川の源流部に滝がある。川をさかのぼった谷の奥で、落差のある地形から清水が流れ落ちている。滝には「清滝権現」がまつられ、毎年7月に祭礼がおこなわれる。山林に入ってから滝までの道程は涼しく、歩いているとさわやかな気分になる。道中に役行者や不動明王像がまつられていることから、自然の中に宗教的なものを感じ取る人々が多かったものと思われる。

谷の道は川沿いということもあり、常に一定に湿度が保たれており、多くのコケやシダ、多彩な植物がみられる。周囲の山林は地元の生産森林組合などが管理しており、スギやヒノキを中心に林床にはサカキなどの低木が見られる。かつてはこの谷から井手町まで至る道があったというが、今はよくわからなくなっている。

## ・ 大滝周辺

町内を東西に流れ、宇治川に合流する田原川は、湯屋谷にある大滝を源にする。その大滝は町内でも最大の滝として知られ、古くは絵図に「大威徳の滝」として描かれる。落差十数メートルから清水が流れ落ちるその滝には大滝大明神がまつられ、毎年9月1日に酒を飲ませたウナギを滝つぼに放つ「大瀧祭」が行われる。

大滝のある湯屋谷地区は鷲峰山系から伸びた谷筋がいくつにも分かれた谷に集落が形成され、鷲峰山寺とその周辺を描いた絵図にはいくつもの寺院が描かれている。かつては温泉がわき出していたことが地名の由来であるといい、現在も冷泉とされるものがある。大滝までは湯屋谷地区に入って最初の分岐点（「石詰」と「中谷」集落の分岐）から中谷集落に入り、次の分岐点（「中谷」と「西谷」集落の分岐）で田原川をさかのぼりながら中谷集落を進む。人家が途切れてもさらに林道を進むと谷の奥に滝がある。道中の林道も周囲を山林が取り囲み、森林浴をしながらハイキングを楽しむことができる。この大滝から鷲峰山へ登る道があったというが、現在はわからなくなっている。

大滝は町指定文化財（名勝）となっている。

## ・ 天皇谷

荒木地区には「天皇」という地名があり、この地に「田原天皇（施基皇子または志貴皇子）」の住まいがあったという伝承がある。この人物は天智天皇の第7皇子で、万葉集にその歌が残されている。皇子は都を離れてこの地に居を構え、高尾で馬を駆ったという（その場所は「王院の馬場」と呼ばれた）。その死後、山上に陵墓が作られたというが、それがどこにあるのかは不明。谷の入り口には「田原天皇社」がまつられ、現在は大宮神社に合祀されているが石碑が残る。一方で、奈良市の「田原」にはその陵墓とされる古墳がある。

荒木地区は大峰山系に源を発する荒木川から流出した土石が形成した扇状地にあり、古くから集落が営まれていたことが発掘調査からわかっている。南面する台地には白鳳時代（7世紀）に古代寺院「山瀧寺（さんりゅうじ）」が建立された。その実態に迫るべく町教育委員会が実施した範囲確認調査では多数の瓦片に混じって古墳に備え付けられた円筒埴輪片らしきものや、縄文時代早期の土器片が見つかっている。

この扇状地を形成した荒木川のある谷間をさかのぼると、見事な巨岩の数々が見られ

る。中には田原天皇の馬が足跡を付けたという伝承にちなむ「天皇はんの馬の足型石」という岩もある。町内各地では戦時中にマンガンを採掘したという跡が残されており、天皇谷にも大きな穴の開いた巨岩がある。

谷にはカリガネソウの群落があり、上流に砂防ダムを設置する工事が行われた際に移植作業が実施され、現在は多数の株が9月頃に青い花をつける。

#### ・くつわ池

宇治田原町の最も西側、宇治市や城陽市などと境界を接する郷之口末山の丘陵上にふたつのため池がある。昔の絵図には「香達池」と書かれており、かつては周辺に寺院らしきものがあったという。いつしかふたつの池の形が馬具の「轡（くつわ）」に似ていることから「くつわ池」と呼ばれるようになった。池の周囲は「末山・くつわ池自然公園」としてキャンプ場などが整備され、周辺住民の憩いの場となっている。池は釣堀として利用され、ブルーギルなどの外来魚も侵入しているが、ふたつある池のうち、「下の池」にはヒシやジュンサイが生えている。一方で、奥にある「新池」は2013年の台風時の大雨で堤体が決壊し、以後、ため池としての機能は失われている。

くつわ池の上方にある「三郷山」は現在の宇治田原と久御山町にある3つの「郷」から繰り出した御輿が集結する「三郷祭」が開催されていたといい、現在府立みどりヶ丘運動公園となっている付近は久御山町の飛び地になっている。

周辺は鳥獣保護区として狩猟が制限されている。

#### ・鷲峰山

かつて山岳寺院が建ち並び、現在も修験道の行場がある鷲峰山の北側は宇治田原町の領域になっている。南山城の最高峰であり、金胎寺境内のある山頂付近は和束町内となっている。現在も宇治田原並びに和束とは深い結びつきがあり、毎年9月に金胎寺で行われる護摩焚きには双方から真言宗寺院の僧侶が参加する。山頂部はかつて北斗星を拝した場所とされ、現在も宝篋印塔が建っている。この山は「空鉢の峰」と呼ばれ、ここで修行していた泰澄法師が空の托鉢を麓の村まで飛ばし、食物を乗せて戻ってきたという伝承がある。

最盛期の鷲峰山寺を描いたと思われる絵図には現在の宇治田原側にも多数の寺院が描かれており、現在の立川大道寺地区からの参詣道には要所要所に「丁石」という距離を刻んだ標石が設置されていたが、失われたものも多い。

現在山域の多くはスギ・ヒノキの人工林となっていて、林道網も整備されている。標高が高いこともあり、冬季には積雪しやすく、林床の植物相も低地とは異なっている部分がある。

現在も山頂付近を経由して和束町と行き来する道は「東海自然歩道」として整備されており、多くの人がハイキングに訪れている。山頂部から少し下った「観音平」と呼ばれるあたりには休憩所が整備され、かつてはキャンプ場としてにぎわったという。

鷲峰山からは田原川だけでなく、幾筋もの谷筋から河川が流れ出ており、昆虫や両生類などの住処となっている。

## ・ 河川

町内では幾筋もの谷筋から河川が流れ出て、主に田原川と奥山田川となって町外へ流れ出ている。河川改修によって流路の変更や河床を整備したところも多いが、山からは多くの土砂が流れ出ている。河川敷にはアシが繁茂していることも多く、一定の年数で刈り取りや浚渫が行われている。

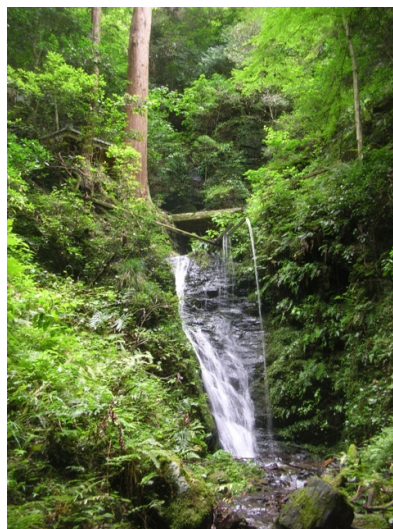
下水道や浄化槽が普及したおかげで河川の水質は良好な状態が保たれ、魚や水棲昆虫など多様な生物が暮らしている。またカルガモやサギ類、カワウなどの野鳥が飛来し、カワセミの姿を見つけることもできる。

梅雨頃にはゲンジボタルなどが飛び交い、「京都府の自然 200 選」に選定されている。

このように良好な環境が保たれている町内の河川だが、近年は特定外来生物であるヌートリアが住み着いている場所もある。



大滝



龍王の滝



田原川

## 宇治田原の自然環境と歴史・民俗、四季折々の詩歌等

### 「春」

天智天皇の第7皇子「施基（志貴）皇子（田原天皇）」は、荒木地区の大峰山系の麓に暮らし、「石ばしる 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも」（万葉集巻八）とワラビを愛でている。

1159（平治元）年の平治の乱では、後白河天皇の信任が厚かった信西（藤原通憲）が源義朝に追われ、今の信楽で追っ手に捕まり斬首された。その首を領民がもらい受け、彼の領地であった宇治田原に塚を作って丁重に葬った（信西入道塚）。近くにはその首を洗ったという池があり、ハッチョウトンボやモリアオガエル、イモリなどの生息地になっている。

### 「夏」

町内では5月の連休中には田植えが行われ、新茶の摘み取りに忙しくなる。山からはホトトギスの声が聞こえる。

川端康成は「美しさと哀しみと（抄）」と題する作品で、画家の音子さんと、弟子のけい子さんがアトリエで談笑する描写の中に、湯屋谷地区へ幾度も写生に通つての帰り、村人から新茶を贈られたのを、急須で淹れては味を楽しむ場面がある。

立川の大道寺地区の道も、深い歴史を感じることができる。室町時代の北条早雲（伊勢新九郎）が京の都から南関東を制覇する司馬遼太郎の長編歴史小説の「箱根の坂」では、冒頭はこの大道寺を舞台にスタートする。作品では早雲の義理の妹・千萱が登場。「チガヤ」とはなんと美しい名であろうかと思う。

司馬遼太郎は宇治田原へ取材に訪れ、「信楽へ抜ける道あり。柿若葉」と、帰路に一句を置いた。柿若葉とは、きっと古老柿の材料・鶴の子柿のことだろう。

平安時代末期の歌人僧・西行は、新古今和歌集・夫木抄の暮山路と題し、和歌を詠んでいる。「夕されや 檜原のみねを越え行けば すごくきこゆる 山鳩のこゑ」とあり、くつわ池自然公園の入口に歌碑がすえられている。檜原はヒノキであり、山鳩はキジバトのことだろう。あわせてもう一首「古畑の 岨のたつ木にいる鳩の 友呼ぶこゑの すごき夕暮れ」と詠まれている。そして、夫木抄には「ゆふぐれや 田原のみね」とあるから、山城の国宇治田原の山と、日本古典文学大系29に解説されている。

### 「秋」

百人一首で多くの人に知られる猿丸大夫は「奥山に 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の 声きく時ぞ 秋は悲しき」と詠んでいる（古今和歌集では「よみ人知らず」）。紅葉はイロハカエデ、鹿はニホンジカのことである。なお、禅定寺区には大夫をまつる「猿丸神社」が鎮座する。

与謝蕪村は、やはり当地の門人・奥田毛條に招かれて、1783（天明3）年に高尾地区の山路を松茸狩りに妻子を連れて訪れている。松茸を見つけた喜びとともに吟じられた俳句に「見残しの 茸のかほりや 宇治拾遺」とあり、郷之口の妙楽寺境内に句碑がひ

っそりと建っている。その異句が「君見よや 拾遺の茸の 露五本」。

蕪村を招いた毛條も天明の俳諧集「松のそなた」に多くの句を残している。「小刀の 刃に流るるや 梨の水」とあり、「梨の水」と詠むところに俳人らしい、小気味よさがあり、汁としなかったことは美しい。この時代、梨は野生種に近いものであったろうが、水分はたっぷりとあったであろう。

「冬」

「田原の四季の唄」から、冬の唄をかかげる。

〱田原よいとこ お茶どころ ああよいよい 玉露煎茶も日本一 お茶の香りに ころ柿を いろりかこんで 冬の夜 さのよいよい  
と唄い、じっと春の来るのを待ち望んだ。

他にも吉川英治の「鳴門秘帳」にも、白洲正子の紀行随筆文集「かくれ里」にも宇治田原の自然環境、生活環境のことや神事・行事が綴られている。生物の多様性に人々の暮らしが根付いていることは誠にうれしいことである。(阪本)



## レッドリスト・ブラックリスト

「レッドリスト」とは絶滅のおそれのある野生生物のリストのことで、国際的には国際自然保護連合（IUCN）が作成し、国内では環境省の他、都道府県や市町村が作成している。環境省のカテゴリーは「絶滅（EX）」から「絶滅のおそれのある地域個体群（LP）」まで区分されている。レッドリストに掲載された種に対して法的規制はないが、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」における希少野生動植物種の指定や環境アセスメントなどの野生生物の保護・保全における基礎資料として使用されている。最新版は2019年版となっている。

京都府では2002年に作成され、2013年に改訂されている（レッドデータブックの発行は2015年）。宇治田原町でも2006年に「宇治田原町レッドデータブック」が発行された。都道府県単位で作成されることは多いが、当時としては市町村単位でそのようなものを作成したのは例が少ない。

### 環境省のレッドリストカテゴリ

絶滅（EX）	国内で絶滅したと考えられる
野生絶滅（EW）	飼育や栽培など自然区域の外側でのみ存続
絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）	絶滅の危機に瀕している
絶滅危惧ⅠA類（CR）	近い将来野生での絶滅の危険性が高い
絶滅危惧ⅠB類（EN）	ⅠAほどではないが近い将来野生で絶滅の危険性
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	絶滅の危険性が増大している
準絶滅危惧（NT）	生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性
情報不足（DD）	評価するだけの情報が不足
絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	地域的に孤立した個体群で絶滅のおそれが高い

### 京都府レッドリストカテゴリ

絶滅種	府内ではすでに絶滅したと考えられる
絶滅寸前種	府内において絶滅の危機に瀕している
絶滅危惧種	府内において絶滅の危険性が増している
準絶滅危惧種	府内において存続基盤が脆弱
要注目種	府内での生息・生育状況について今後の動向を注目すべき、及び情報が不足している

京都府レッドリストでは野生生物のみならず、その生存基盤である地形、地質、それらの総体である地域生態系についても対象としている。

## 宇治田原町内におけるレッドリスト掲載生物

京都府レッドデータブックには、宇治田原町内にも分布する野生生物などが掲載されている。その多くは町内に限らず広く府内や南部地域に分布しているものもあるが、貝化石のように町内に限定されたものも掲載されている。

下の表は、2006年の町レッドデータブックに掲載されたもののうち、京都府もしくは環境省のレッドリストに掲載されたもので、2006年以降にカテゴリが変更されたもの、和名や学名、分類が変更されたものを反映している。

現在の和名	現在の学名	現在の分類			現在のカテゴリ	
		目	科	属	京都府RDB	環境省RDB
ホンダザル(ニホンザル亜種)	<i>Macaca fuscata fuscata</i>	サル(霊長)	オナガザル	マカク	要注目種	
ホンダギツネ(アカギツネ亜種)	<i>Vulpes vulpes japonica</i>	ネコ(食肉)	イヌ	キツネ	要注目種	—
ホオジロムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>	ネズミ(齧歯)	リス	ムササビ	準絶滅危惧種	—
ハタネズミ	<i>Microtus montebelli montebelli</i>	ネズミ(齧歯)	ネズミ	ハタネズミ	準絶滅危惧種	—
ホンシュウカヤネズミ	<i>Micromys minutus hondonis</i>	ネズミ(齧歯)	ネズミ	カヤネズミ	準絶滅危惧種	—
クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>	カメ	イシガメ	イシガメ	要注目種	—
ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	カメ	イシガメ	イシガメ	要注目種	準絶滅危惧(NT)
ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	カメ	スッポン	キョクトウスッポン	要注目種	情報不足(DD)
ニホントカゲ	<i>Plestiodon japonicus</i>	トカゲ	トカゲ	トカゲ	要注目種	—
タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i>	トカゲ	タカチホヘビ	タカチホヘビ	要注目種	—
アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>	トカゲ	ナミヘビ	ナメラ	要注目種	—
ヒバカリ	<i>Amphiesma vibakari vibakari</i>	トカゲ	ナミヘビ	ヒバカリ	要注目種	—
ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i>	トカゲ	ナミヘビ	ヤマカガシ	準絶滅危惧種	—
ニホンマムシ	<i>Gloydius blomhoffii</i>	トカゲ	クサリヘビ	マムシ	要注目種	—
カスミサンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i>	サンショウウオ	サンショウウオ	サンショウウオ	絶滅寸前種	絶滅危惧II類(VU)
ヒダサンショウウオ	<i>Hynobius kimurae</i>	サンショウウオ	サンショウウオ	サンショウウオ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
アカハライモリ	<i>Cynopus pyrrhogaster</i>	サンショウウオ	イモリ	イモリ	要注目種	準絶滅危惧(NT)
ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>	カエル	アカガエル	アカガエル	要注目種	—
ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i>	カエル	アカガエル	アカガエル	要注目種	—
トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	カエル	アカガエル	トノサマガエル	要注目種	準絶滅危惧(NT)
ナゴヤダルマガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i>	カエル	アカガエル	トノサマガエル	絶滅寸前種	絶滅危惧I B類(EN)
ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i>	カエル	アカガエル	アカガエル	要注目種	—
ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>	カエル	ヌマガエル	ヌマガエル	要注目種	—
シュレーゲルアオガエル	<i>Rhacophorus schlegelii</i>	カエル	アオガエル	アオガエル	要注目種	—
カジカガエル	<i>Bueerrgia buergeri</i>	カエル	アカガエル	カジカガエル	要注目種	—
アブラハヤ	<i>Rhynchocypris lagowskii steindachneri</i>	コイ	コイ	アブラハヤ	絶滅寸前種	—
ヌマムツ	<i>Candidia sieboldii</i>	コイ	コイ	カワムツ	準絶滅危惧種	—
チュウガタスジシマドジョウ	<i>Cobitis striata striata</i>	コイ	ドジョウ	シマドジョウ	絶滅寸前種	絶滅危惧II類(VU)
アカザ	<i>Liobagrus reinii</i>	ナマズ	アカザ	アカザ	絶滅危惧種	絶滅危惧II類(VU)

現在の和名	現在の学名	現在の分類			現在のカテゴリ	
		目	科	属	京都府RDB	環境省RDB
クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i>	チョウ(鱗翅)	シジミチョウ	クロシジミ	準絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類(EN)
ナミハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i>	コウチュウ	オサムシ	ハンミョウ	絶滅危惧種	—
ゲンジボタル	<i>Luciola cruciata</i>	コウチュウ	ホタル	ゲンジボタル	要注目種	指標昆虫
ヘイケボタル	<i>Luciola lateralis</i>	コウチュウ	ホタル	ゲンジボタル	要注目種	—
セスジイトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i>	トンボ	イトンボ	クロイトンボ	要注目種	—
コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i>	トンボ	サナエトンボ	コサナエ	要注目種	—
ミヤマアカネ	<i>Sympetrum pedemontanum</i>	トンボ	トンボ	アカネ	準絶滅危惧種	—
ヌマエビ	<i>Paratya compressa</i>	エビ	ヌマエビ	ヌマエビ	準絶滅危惧種	—
カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	準絶滅危惧種	—
ササゴイ	<i>Butorides striatus</i>	ベリカン	サギ	ササゴイ	準絶滅危惧種	—
チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>	ベリカン	サギ	アオサギ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	カモ	カモ	オシドリ	準絶滅危惧種	情報不足(DD)
トモエガモ	<i>Anas formasa</i>	カモ	カモ	マガモ	準絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ミコアイサ	<i>Mergus albellus</i>	カモ	カモ	アイサ	準絶滅危惧種	—
ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	タカ	タカ	ミサゴ	絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i>	タカ	タカ	ハチクマ	絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	タカ	タカ	ハイタカ	絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	タカ	タカ	ハイタカ	絶滅危惧種	—
ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	タカ	タカ	ハイタカ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	タカ	タカ	ノスリ	準絶滅危惧種	—
サシバ	<i>Butastur indicus</i>	タカ	タカ	サシバ	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	絶滅危惧種	—
ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringi</i>	キジ	キジ	ヤマドリ	準絶滅危惧種	—
クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	ツル	クイナ	クイナ	絶滅危惧種	—
ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	ツル	クイナ	ヒメクイナ	絶滅危惧種	絶滅危惧(NT)
タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i>	チドリ	タマシギ	タマシギ	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	チドリ	チドリ	チドリ	準絶滅危惧種	—
シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	チドリ	チドリ	チドリ	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ムナグロ	<i>Pluvialis dominica</i>	チドリ	チドリ	ムナグロ	準絶滅危惧種	—
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	チドリ	チドリ	タゲリ	準絶滅危惧種	—
ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i>	チドリ	シギ	オバシギ	準絶滅危惧種	—
ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	チドリ	シギ	オバシギ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	チドリ	シギ	クサシギ	準絶滅危惧種	—
クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	チドリ	シギ	クサシギ	準絶滅危惧種	—
タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	チドリ	シギ	クサシギ	—	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>	チドリ	シギ	キアシシギ	準絶滅危惧種	—
イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	チドリ	シギ	Actitis	準絶滅危惧種	—
チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus</i>	チドリ	シギ	ダイシャクシギ	準絶滅危惧種	—
ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	チドリ	シギ	ヤマシギ	絶滅危惧種	—
チュウジシギ	<i>Gallinago megala</i>	チドリ	シギ	タシギ	準絶滅危惧種	—
オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	チドリ	シギ	タシギ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧(NT)
コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	チドリ	カモメ	アジサシ	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
アオバト	<i>Treron sieboldii</i>	ハト	ハト	アオバト	準絶滅危惧種	—

現在の和名	現在の学名	現在の分類			現在のカテゴリ	
		目	科	属	京都府RDB	環境省RDB
ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	カッコウ	カッコウ	カッコウ	準絶滅危惧種	—
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	カッコウ	カッコウ	カッコウ	準絶滅危惧種	—
ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	カッコウ	カッコウ	カッコウ	準絶滅危惧種	—
コノハズク	<i>Otus sunia</i>	フクロウ	フクロウ	コノハズク	絶滅寸前種	—
アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>	フクロウ	フクロウ	アオバズク	準絶滅危惧種	—
フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ	フクロウ	フクロウ	準絶滅危惧種	—
ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	絶滅危惧種	—
ヒメアマツバメ	<i>Apus nipalensis</i>	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	絶滅危惧種	—
ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	絶滅危惧種	—
アカゲラ	<i>Picoides major</i>	キツツキ	キツツキ	アカゲラ	準絶滅危惧種	—
オオアカゲラ	<i>Picoides leucotos</i>	キツツキ	キツツキ	アカゲラ	絶滅危惧種	—
アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	スズメ	モズ	モズ	—	絶滅危惧 I B (EN)
コルリ	<i>Luscinia cyane</i>	スズメ	ツグミ	Luscinia	準絶滅危惧種	—
トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	スズメ	ツグミ	トラツグミ	準絶滅危惧種	—
クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	スズメ	ヒタキ	トラツグミ	準絶滅危惧種	—
コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	スズメ	ヒタキ	サメビタキ	絶滅危惧種	—
サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	スズメ	カササギヒタキ	サンコウチョウ	準絶滅危惧種	—
クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	スズメ	ホオジロ	ホオジロ	絶滅危惧種	—
コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	スズメ	ムクドリ	ムクドリ	絶滅危惧種	—
クロカワ	<i>Boletopsis leucomelaena</i>	イボタケ	マツバハリタケ	クロカワ	準絶滅危惧種	情報不足 (DD)
ケロウジ	<i>Sarcodon scabrosus</i>	イボタケ	マツバハリタケ	コウタケ	要注目種	—
マツタケ	<i>Tricholoma matsutake</i>	ハラタケ	キシメジ	キシメジ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧種 (NT)
ハツタケ	<i>Lactarius lividatus</i>	ベニタケ	ベニタケ	チチタケ	準絶滅危惧種	—
マルタニシ	<i>Cipangopaludia chinensis laeta</i>	新生腹足	タニシ	マルタニシ	準絶滅危惧種	絶滅危惧 II 類 (VU)
モノアラガイ	<i>Radix auricularia japonica</i>	異鰓	モノアラガイ	モノアラガイ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧 (NT)
マシジミ	<i>Corbicula leana</i>	ザルガイ	シジミ	シジミ	絶滅危惧種	絶滅危惧 II 類 (VU)
オケラ	<i>Atractylodes japonica</i>	キク	キク	オケラ	絶滅危惧種	絶滅危惧種 C
オミナエシ	<i>Patrinia scabiosaeifolia</i>	マツムシソウ	オミナエシ	オミナエシ	準絶滅危惧種	—
ハシリドコロ	<i>Scopolia japonica</i>	ナス	ナス	ハシリドコロ	準絶滅危惧種	—
カリガネソウ	<i>Tripora divaricata</i>	シソ	シソ	Tripora	準絶滅危惧種	—
センブリ	<i>Swertia japonica</i>	リンドウ	リンドウ	センブリ	要注目種	—
リンドウ	<i>Gentiana scabra</i>	リンドウ	リンドウ	リンドウ	要注目種	—
ハルリンドウ	<i>Gentiana thunbergii</i>	リンドウ	リンドウ	リンドウ	絶滅寸前種	—
フモトスミレ	<i>Viola sieboldii</i>	キントラノオ	スミレ	スミレ	準絶滅危惧種	—
イヌナズナ	<i>Draba nemorosa</i>	アブラナ	アブラナ	ナズナ	準絶滅危惧種	—
キケマン	<i>Corydalis heterocarpa var. japonica</i>	キンボウゲ	ケシ	キケマン	準絶滅危惧種	—
ミヤコミズ	<i>Pilea kiotensis</i>	バラ	イラクサ	ミズ	絶滅危惧種	—
クマガイソウ	<i>Cypripedium japonicum</i>	キジカクシ	ラン	アツモリソウ	絶滅寸前種	絶滅危惧種 II 類 (VU)
カヤラン	<i>Thrixspermum japonicum</i>	キジカクシ	ラン	カヤラン	準絶滅危惧種	—
ナンバンギセル	<i>Aeginetia indica</i>	ゴマノハグサ	ハマウツボ	ナンバンギセル	要注目種	—
ユキヤナギ	<i>Spiraea thunbergii</i>	バラ	バラ	シモツケ	要注目種	—
オオシロカゲロウ	<i>Ephoron shigae</i>	カゲロウ	シロイロカ	Ephoron	要注目種	—
クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i>	コウチュウ	ゲンゴロウ	ゲンゴロウ	絶滅危惧種	準絶滅危惧種 (NT)
コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i>	カメムシ	コオイムシ	コオイムシ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧種 (NT)
タガメ	<i>Lethocerus deyrollei</i>	カメムシ	コオイムシ	タガメ	絶滅危惧種	絶滅危惧 II 類 (VU)

## マツバラン（松葉蘭）

学名：*Psilotum nudum*

マツバラン目マツバラン科マツバラン属

環境省：準絶滅危惧 (NT) 京都府：絶滅寸前種



根も葉もない茎だけで生きているシダ植物。江戸時代には斑入りなど変わりものが珍重される園芸植物として栽培されたが、府内では自生地が2カ所しか知られていない。そんな中、立川地区で発見された株がまったくの野生種なのか、栽培品の胞子が飛来して発芽したものかは不明。

## クマガイソウ（熊谷草）

学名：*Cypripedium japonicum*

キジカクシ目ラン科アツモリソウ属

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 京都府：絶滅寸前種



和名は膨らんだ形の唇弁を昔の武士が背中に背負った母衣に見立て、源平合戦の熊谷直実に由来する（アツモリソウは一ノ谷の戦いで彼に討たれた平敦盛が由来）。

低山の森林内に生育し、大きな集団を作る。草丈は40cmくらいまで、葉は対生するように二枚つき、それぞれ扇型の特徴的な形をしている。

花はその間から伸びた茎の先につき、横を向く。花弁は5枚の細い楕円形で緑色を帯び、唇弁は大きく膨らんだ袋状で、白く、紫褐色の模様がある。

かつて新聞が発生地を詳細に報じたため盗掘被害にあったことがある。

## カヤネズミ（茅鼠）

学名：*Micromys minutus*

ネズミ目ネズミ科カヤネズミ属

環境省： 京都府：準絶滅危惧種



日本で最も小型のネズミ類。体長5～6cmほどで明るい茶褐色。休耕田や河川敷などの背丈の高い草原で暮らしており、ススキなどイネ科植物を利用して球形の巣を作る。

イネ科の雑草の種子や昆虫を食しているが、水田のイネを食べることはほとんどない。

2006年の町レッドデータブックには巣の写真のみ掲載されていたが、2017年に田原川の近くで生存が確認された。

## ブラックリスト（宇治田原町内の外来種）

普通、「ブラックリスト」といえば、ネガティブな情報を掲載された人物の一覧を思い浮かべるが、ここでは絶滅危惧種などを掲載した「レッドリスト」に対して、生態系などに影響を与える可能性のある外来種に対して用いる呼称である。

レッドリストと異なり、環境省ではまだ正式なものは発表されていないが、2010年に愛知県で開催された多様性条約第10回締約国会議で決議された「愛知目標」では、「2020年までに侵略的外来種とその定着経路が特定される」等が掲げられていることから、レッドリスト同様にカテゴライズされた外来種ブラックリスト（仮称）の作成が検討されている（兵庫県や大阪府堺市では独自にブラックリストを作成）。なお、外来種リストを作成している自治体では独自にレッドリストに対する「ブルーリスト」という呼称を用いているところもある。ただ、「ブルー（青）」では安全なイメージを抱きかねないため、ブラック（黒）のほうがふさわしいかもしれない。

外来種の項でも述べたように、日本国内にはすでに多数の外来種が侵入しているが、ここでブラックリストに掲載したものは宇治田原町レッドデータブック（2006）に掲載された生物リストの中から「特定外来生物」に指定されたものや京都府外来生物リストに掲載されたものを抜粋したものである。

### 京都府の外来生物リストのタイプ分類

	影響度大 A	影響度大 B	影響度大 C	影響度不明
確認種 定着 a	Aa	Ba	Ca	Da
確認種 定着 b	Ab	Bb	Cb	Db
確認種 定着 c	Ac	Bc	Cc	Dc
未確認種	Ad	Bd	Cd	Dd

### 京都府の外来生物リストのカテゴリ一覧

被害甚大種	府内における被害が大きく（又は可能性が高く）緊急対策が必要
被害危惧種	府内における被害があり（又は可能性が高く）対策が必要
準被害危惧種	今後府内で被害が起こる可能性があり対策の検討が必要
要注目種	府内において今後の動向を注目すべき
情報不足種	情報が不足している外来種

## 宇治田原町ブラックリスト（外来生物）

アライグマ（*Procyon lotor*）ネコ目アライグマ科アライグマ属

外来生物法：特定外来生物 京都府：被害甚大種 Aa



今、町内で最も大きな被害をもたらしている特定外来生物。北米が原産地だが、むかし、アニメのキャラクターとして人気となり、ペットとして輸入されたが凶暴で飼えなくなり、野外に捨てられたものが全国で拡散している。今や在来のタヌキよりも身近で見られるようになり、タヌキとしている創作物などはよく見るとアライグマであることも多い。タヌキとは異なり器用に物をつかんだりできる

長い指、しましまのしっぽなどが区別点。農作物だけでなく、住居に侵入したり、文化財となっている建造物を傷つけるという被害も発生している。天敵がおらず、繁殖力も高いためなかりの数が生息しているが、対策としては地道に捕獲・駆除を行うしかない。

ヌートリア（*Myocastor coypus*）ネズミ目ヌートリア科ヌートリア属

外来生物法：特定外来生物 京都府：被害甚大種 Aa



南米原産のネズミの仲間。もとは毛皮を利用するため輸入・繁殖されていたものが需要の減少で野外に放たれ野生化した。

土手などの水辺に巣穴を掘って生活し、水生植物の葉や地下茎を食べる。

町内では田原川河川敷で泳ぐ姿が目撃されているが、侵入経路は不明。

現時点で具体的な被害状況は不明だが、野菜を食害したり、巣穴により堤防や畦

の強度に影響する可能性がある。

特定外来生物に指定されたものは、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」により輸入・販売・不正飼養・野外への放逐は禁止されており、懲役や罰金刑が科される。

オオキンケイギク (*Coreopsis lanceolata*) キク目キク科ハルシャギク属

外来生物法：特定外来生物 京都府：準被害危惧種 Ba



北米原産の宿根草で、ワイルドフラワーとして利用されたが、現在は栽培が禁止されている。

丈夫で繁殖力が強いため、河川敷などで増えて、在来植物の生育に影響を与える可能性がある。

キバナコスモスに似ているが、葉の形が異なり（キバナコスモスは細かく裂けているが本種は長細い）、花期も異なる（キバナコスモスは夏～秋、本種は初夏）。

現時点では田原川河川敷で繁殖しており、年々面積が広がっている。

オオクチバス (*Micropterus salmoides*) スズキ目サンフィッシュ科オオクチバス属

外来生物法：特定外来生物 京都府：被害甚大種 Aa



北米原産の淡水魚。コクチバス (*M. dolomieu*) などとともに「ブラックバス」と通称される。

肉食性で魚類、水棲昆虫などを補食する。琵琶湖ではニゴロブナなどの在来魚が減少するなどの影響で積極的に捕獲・駆除を行っている。

各地の湖沼に拡散し、一部の釣り愛好家がリリースしたこともその原因とされる。身近なため池で釣りをするためわざわざ持ち込まれることがあるといい、町

内でも立ち入り禁止のため池に入り込んで釣りをしている姿が見られる。

町内ではそのほかにもセアカゴケグモなどの特定外来種が定着している。

本文中のアライグマ、ヌートリア、オオクチバスの画像は環境省が啓発用に掲載し使用を許諾している画像を使用している。



現在の和名	現在の学名	現在の分類			現在のカテゴリ	
		目	科	属	京都府RDB	環境省RDB
チョウセンイタチ	<i>Mustela sibirica</i>	ネコ(食肉)	イタチ	イタチ	被害危惧種	—
アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	ネコ(食肉)	アライグマ	アライグマ	被害甚大種	特定外来生物
ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>	ネズミ(齧歯)	ネズミ	クマネズミ	被害甚大種	—
クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>	ネズミ(齧歯)	ネズミ	クマネズミ	被害危惧種	—
ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	ネズミ(齧歯)	ネズミ	ハツカネズミ	被害危惧種	—
ヌートリア	<i>Myocastor coypus</i>	ネズミ(齧歯)	ヌートリア	ヌートリア	被害甚大種	特定外来生物
ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	ネコ(食肉)	ジャコウネコ	ハクビシン	被害危惧種	—
アカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	カメ	ヌマガメ	アカミミガメ	被害甚大種	要注意外来生物
ウシガエル	<i>Lithobates catesbeiana</i>	カエル	アカガエル	アメリカアカガエル	被害危惧種	特定外来生物
カダヤシ	<i>Gambusia affinis</i>	カダヤシ	カダヤシ	カダヤシ	被害甚大種	特定外来生物
オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>	スズキ	サンフィッシュ	オオクチバス	被害甚大種	特定外来生物
ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>	スズキ	サンフィッシュ	ブルーギル	被害甚大種	特定外来生物
セアカゴケグモ	<i>Latrodectus hasselti</i>	クモ	ヒメグモ	ゴケグモ	準被害危惧種	特定外来生物
アメリカザリガニ	<i>Cambarus clarkii</i>	エビ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	被害甚大種	要注意外来生物
コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>	キジ	キジ	コジュケイ	情報不足種	—
サカマキガイ	<i>Physa acuta</i>	有肺	サカマキガイ	Physa	情報不足種	
スクミリンゴガイ	<i>Pomacea canaliculata</i>	中腹足	リンゴガイ	リンゴガイ	被害甚大種	要注意外来生物
オオオナモミ	<i>Xanthium occidentale</i>	キク	キク	オナモミ	被害危惧種	要注目外来生物
ハルジオン	<i>Erigeron philadelphicus</i>	キク	キク	ムカシヨモギ		要注意外来生物
ヒメジョオン	<i>Erigeron annuus</i>	キク	キク	ムカシヨモギ		要注意外来生物
アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i>	キク	キク	センダングサ	被害危惧種	
セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i>	キク	キク	タンポポ	被害危惧種	要注意外来生物
オオイヌノフグリ	<i>Veronica persica</i>	シソ	オオバコ	クワガタソウ	被害危惧種	
ワルナスビ	<i>Solanum carolinense</i>	ナス	ナス	ナス		要注意外来生物
ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corymbosa</i>	カタバミ	カタバミ	カタバミ		要注意外来生物
オランダガラシ	<i>Nasturium officinale</i>	フウチョウソウ	アブラナ	オランダガラシ		要注意外来生物

## ・国内「外来種」問題

ある地域で野生状態での種が絶滅した場所に、他の地域から「同種」の生物を導入することがしばしば見られる。また、もともとその地域には生息していなかった生物を導入して「ビオトープ」や「豊かな自然を取り戻す」取り組みを実施する例も見られる。果たして、他の地域から持ってきた生物を放つことがその地域の自然を回復することにつながるのか？

「外来種」の問題というと、国外から持ち込まれた生物のことを連想するが、「外来種問題」は国外からの導入だけにとどまらない。もともとその地域に分布していなかった生物を人の手で移してきた場合も「外来種（国内由来の外来種）」といえる。

よく見られる事例として、汚染が進んだ河川の環境を改善し、または新たに整備された河川にホタルやその餌となるカワニナを放流する、池や河川にコイ（ニシキゴイなど）やメダカを放流することがある。しかし、もともとその地域に生息していなかった生物を放つと、それまでその地域で維持されてきた生態系を乱すもととなる可能性がある。

では、以前ある種の生物が生息していた又は生息している地域に「同種」の生物を導入する場合はどうなのか？生物は長い年月の間に「同種」であっても地域ごとに少しずつ遺伝的な差異があり、それが遺伝的な多様性を産み出すもととなり、いずれは別種として分化する可能性もある。ところが、そこに異なる地域に生息していた生物を持ってくると、その地域で進化してきた遺伝グループと異なるグループの遺伝子が混入することとなり、「遺伝子汚染」が発生する。

せっかく自然や生態系の回復を願っても、そのような問題を認識しないまま導入することはその願いを無に帰すこととなりかねない。人の手で自然を回復させようとする場合は慎重に手法を検討しなければならない。

## ・宇治田原に「やってきた」動物

2004年11月、宇治田原町内でちょっとした騒動が起こった。住民から役場に「熊がいる」という通報があり、職員が現場に駆けつけると、たしかにそれは熊であり、撮影された画像からも間違いではなかった。ただちに学校などに情報が伝えられ、通学路を警戒する一方で熊を探して山狩りが行われた。しかし、熊の姿は発見されず、搜索は翌日以降に持ち越されると思われていたところ、その翌日早朝に該当する熊が国道で交通事故に遭い死亡した。回収された死体は体長70cmほどのツキノワグマの子どもであった。

多様な野生動物が生息する町内にあって、それまで熊の生息はおろか、目撃情報もなかった。ではその熊はどこから来たのか？後にわかったことだが、滋賀県内から宇治市の山中を經由して宇治田原方面に移動する熊が目撃されていたという。まだ子どもの熊がたった1匹で山中を移動してくることは考えられないことだが、何らかの理由で親とはぐれたのかもしれない。その不幸にも死亡した熊は教材として活用するため、剥製となって小学校に保管されている。

なお、2017年にも別の地区で熊らしい動物の目撃情報があったが、存在を示す痕跡は発見されず、その後も目撃情報はない。

## 宇治田原町の野生生物

ここでは、これまでに知られているもの、今回の調査で確認されたものなど、町内に分布する野生生物及び地質について、特徴的なものを掲載する。

「宇治田原の銘木」は、以前からエコパートナーで調査していたもので、町内でも特に有名なもの、特徴的なもの、希少価値のあるものなど、代表的な樹木を紹介する。

なお、掲載している野生生物等の画像は、特に注釈のないものは町内で撮影されたものである。

### ・宇治田原の銘木

町内には天然記念物に指定されたものから、あまり知られていないものまで、「銘木」と呼ぶのにふさわしい立派な樹木がある。特に、無名の銘木については広く知ってもらうためにも紹介したい。

#### 御栗栖神社の大杉

学名 : *Cryptomeria japonica*

マツ目ヒノキ科スギ属

環境省 RD :

京都府 RD :



高さ約 30m 以上、胸高直径約 5m もあるスギで、南区の御栗栖（みくるす）神社の御神木。町内でも最大の樹木と考えられ、大木の多い同神社境内においてもその大きさは群を抜いている。

平成 13 年、宇治田原町指定文化財（天然記念物）となる。

2018 年 9 月の台風 21 号の強風で 3 分の 2 ほどの高さで幹が折れてしまい、かろうじて 1 本だけ枝が残り、生きながらえている。年月の経過により幹中心部が空洞になっていた。



## 清水家のカヤ

学名 : *Torreya nucifera*

マツ目イチイ科カヤ属

環境省 RD :

京都府 RD :



岩山地区の民家敷地に雌雄の株一対が並び、樹齢400年ほどとも伝えられる。大きく枝を伸ばし、遠くからでもわかるほどの巨木で地域のランドマークともなっている。

毎年秋にアーモンド型の実をつけ、殻に包まれた内部は食用になる他、油を絞ることができる。この家では実を高野山に奉納しているという。

御栗栖神社の大杉同様、町指定文化財(天然記念物)となっている。

## 遍照院の紅梅

学名 : *Prunus mume*

バラ目バラ科サクラ属

環境省 RD :

京都府 RD :



奥山田の茶屋村にある真言宗寺院の遍照院は、本能寺の変勃発時に徳川家康とその家臣一行が堺から三河へ逃れた「神君伊賀越え」の道中に立ち寄ったと言われる。

その境内にある紅梅は樹齢は不明だがいかにも古木然とした風格がある。

樹勢が衰えた時期もあったが治療が行われ、毎年3月下旬には薄紅色の花を咲かせる。

家康一行は木津川を渡って城陽の市辺から宇治田原に入り、郷之口城で馬を替えてこの寺で休憩し、多羅尾から伊賀に至り伊勢湾を渡ったと言われている。

## 正寿院のサルスベリ (百日紅)

学名 : *Lagerstroemia indica*

フトモモ目ミソハギ科サルスベリ属

環境省 RD :

京都府 RD :



花が美しく丈夫であるため庭園や公園に植栽される。和名の由来は樹皮のコルク層が剥がれ落ちてすべすべした表面となるため猿が滑って登れないという意味(実際には登れるという)。

夏に縮れた赤又は白い花を咲かせ、長持ちすることから「百日紅」と表記される。

奥山田の真言宗寺院の正寿院は快慶作の木造不動明王座像が重要文化財となっているが以前は静かな山里の寺院だった。しかし、新築された庫裏のハート型の窓がSNSで拡散し、最もホットな観光スポットとなっている。

## 高尾のコーロ（チャ）

学名 : *Camellia sinensis*  
ツツジ目ツバキ科ツバキ属  
環境省 RD : 京都府 RD :



大峰山系の中腹にある集落・高尾地区は弘法大師の井戸伝承で知られるが、集落の奥には現在の簡易水道の水源がある。その近くにある1本の茶の木はその異質なまでの葉の大きさから、通常の茶の木ではないと直感的にわかる。1枚の葉がまるでアオキの葉のように大きい。たまに大きい葉の茶を見るが、この木は葉脈の間が盛り上がって亀の甲羅のようで、まるで異なる。このような巨大な葉を持つ茶の木は通称「コーロ」と呼ばれ、茶の木が持つ遺伝的形質がまれに発現するものだという。町内では他に立川地区で2株確認されている。

## 奥浄土のネズ

学名 : *Juniperus rigida*  
マツ目ヒノキ科ビャクシン属  
環境省 RD : 京都府 RD :



尖った葉でネズミよけにしたことから「ネズミ刺し」が縮まったという。庭木、生け垣、盆栽に用いられる。盆栽では「トショウ」と呼ばれる。「ムロ」「モロノキ」とも呼ばれる。岩山の隠谷住宅地の東側の丘陵裾に数本の株がある。樹形が整っているのが自然木なのか植栽されたものなのか不明。同属のセイヨウネズ (*J. communis*) の実は蒸留酒のジンの香り付けに使用される。

## 宇治田原小学校前のクワ

学名 : *Morus*  
バラ目クワ科クワ属  
環境省 RD : 京都府 RD :



クワは落葉高木で薄い葉の縁に粗い鋸歯を持つ。ヤマゲワ (*M. bombycis*) を養蚕に使用するが、産業の衰退とともに桑畑は減少し、河川敷などで野生化したものが見られる。木イチゴのように粒の集合体の果実が初夏に赤黒く熟して甘くなるが、利用する人は少ない。その果実に寄生して落下したことから翌年きのこを発生させるキツネノヤリタケ・キツネノワンがある。宇治田原小学校の校門前には立派なクワの木があるが、注目されることもなく毎年ひっそりと実を付けている。

その他の野生生物

カリガネソウ（雁金草）



学名 : *Tripora divaricata*  
シソ目シソ科 Tripora 属  
環境省 : 京都府 : 準絶滅危惧種

町内ではいくつかの谷筋に自生している。荒木の天皇谷では、砂防ダムの工事に先立ち、同じ谷筋の工事による影響が及ばない場所に移植され、数を増やしている。9月頃に青紫の花を咲かせ、その花の形が雁に似ていることが和名の由来。

ヒカゲノカズラ（日陰葛）



学名 : *Lycopodium clavatum*  
ヒカゲノカズラ目ヒカゲノカズラ科ヒカゲノカズラ属  
環境省 : 京都府 :

長くつる状になって地面を這っており、一見、コケのように見えるが広義のシダ植物の一種。全体が針状の葉に覆われて長細いブラシ状になっており、所々で根を伸ばして地面に固定されている。夏頃に枝を立ち上げて胞子をつける。乾燥させても緑色が残るため、リースなどの飾りに使用される。また、天の岩戸神話でアメノウズメが身にまとって踊ったといわれ、現在も神事に使われることがある。

キツネノタイマツ（狐松明）



学名 : *Phallus rugulosus*  
スッポンタケ目スッポンタケ科スッポンタケ属  
環境省 : 京都府 :

梅雨時～秋、道ばたや林地などの地上に発生。最初は白い卵形で、それが裂開して柄を伸ばし、先端のカサ表面に胞子を含んだ粘液（グレバ）をつける。グレバからは悪臭を放ち、虫を寄せ付けて胞子を運ばせる。写真は畑の一角に籾殻を積んだ場所に発生したもので、雨が降ると発生し、1日でおれてしまう。

## ヒルムシロ（蛭筵）

学名 : *Potamogeton distinctus*  
オモダカ目ヒルムシロ科ヒルムシロ属  
環境省 : 京都府 :



ため池や用水路の水中の地下茎から茎を水面まで伸ばし楕円形の浮き葉をつけ、水中では細長い水中葉をつける水草。「ヒルムシロ」という和名は浮き葉を蛭が休憩する筵に例えたもの。立川区公民館近くのため池に多数発生している。この池は水の透明度が高く、上からでも水中の様子がよく見える。同属のコバノヒルムシロは府で絶滅寸前種、環境省では絶滅危惧Ⅱ類となっている。

## ネジバナ

学名 : *Spiranthes sinensis* var. *amoena*  
キジカクシ目ラン科ネジバナ属  
環境省 : 京都府 :



背の低い草地で見られる。冬季は楕円形の、成長期は細長い葉をつけ、初夏に長い茎を伸ばして花を付ける。花は小型のピンクの花弁に白い弁舌で、遠目にはランの仲間に見えないが、花をよく見るとランの花の形をしている。花は茎に横向きについて、茎の先端に向かって螺旋状につくのが和名の由来。花の付き方には右まきと左まきがあるがその割合は同じくらいだという。写真は町役場の敷地のもので、最も身近で見られるランの仲間といえる。

## カルガモ

学名 : *Anas zonorhyncha*  
カモ目カモ科マガモ属  
環境省 : 京都府 :



河川や湖沼に生息するカモの一種で、渡りを行わない留鳥。体長は 50cm ほどで頭頂部や背中が黒褐色、雄は腹部よりも胸部が単色で、雌はその差異が少ない。次列・三列風切羽の縁には不明瞭な白色部分がある。主に植物や種子を食べている。田原川の河川敷では 10~12 羽程度のファミリーで泳いでいる姿などが見られ、微笑ましい。

## 宇治田原の野生生物とともに

山地に囲まれた地形の宇治田原町内は、多彩な生物たちの生活の場でもある。主流となる一級河川の田原川とそれを支える山地から流入する河川が13あり、水質は常に良好で安定している。しかし、降水量が一気に上昇する気象変化や、梅雨の時期は水位が上がるが、平常時は流れの穏やかさに子供たちの結構な遊び場である。

水は動植物の恵みとなり、住む人々の心に優しさと、安心感を与えるものである。

植林地と農地・茶園と周辺部の里山等を含めて、豊かな自然環境にあり、貴重な野生生物も数多く確認されている。

ところが、近年のイノシシやシカとサルたちによる被害などにより、カタクリやクマガイソウなどは減少し、風前の灯火である。人の手の加わらなくなった里山などの影響も大きい。

田原川を中心に、やすらぎの道や、末山くつわ池自然公園など、自然と触れ合えるが、林業と、営林の経済バランスの課題もある。

鷲峰山系が主な水源と、奥山田地区の河川は、それぞれに独立した地形であるが、下流の淀川水系へと流出はしている。

いずれの本流も、清らかな水質を保ち、ゲンジボタルの幼虫や、カゲロウ、カワトンボの仲間や甲殻類の水棲生物と、とりまく多彩な昆虫たちを育てている。

その水源には美しい滝が3カ所あり、宗教的信仰として、民俗的な行事がある。毎年9月には大滝で雨乞いの行事が催され、数匹のウナギに酒を飲ませて滝壺に放ち、五穀豊穡や様々な安全を祈願するユニークなおこないである。

支川となる符作川源流の龍王の滝でも、同様の神事があり、参詣に唄われる歌も伝承にある。

高尾の地区には大峰山系に毎年涸れることのない良質の水をわき出す「弘法の井戸」に、天皇谷の溪流には美しくかわいらしい滝が、四季折々を楽しませている。

そのような峡谷や山林と、田畑の灌漑用池などへ足を運ぶと、美しいヤマセミや優美なおシドリにアオジ、そして飛ぶ宝石と愛称のあるカワセミが目を楽しませてくれる。マガモやコガモがゆったりと、またキセキレイやクロセキレイが、尾で岩をたたき、まるで子どもたちの鬼ごっこに似ている。

オオルリやサンコウチョウの鳴き声は、コレルリやヴィヴァルディの音楽を聴くシンフォニーである。猛禽類のミサゴやオオタカの勇姿、山林にはキジやヤマドリが長い美しい尾をひき、コジュケイが高らかに唄っている。

夏の夜は、コノハズクやフクロウにアオバズクが低いベース音を響かせている。神社の鎮守の森にはムササビが飛来する。田園はカエルたちの大合唱とヘイケボタルの信号とヒメボタルの光る点滅が里山のイルミネーションである。

山林のヤマザクラは孤独ななかにも優雅であり、ホウの大きなクリーム色の花は実に見事である。山肌のヤマフジの紫が風にゆれ、ヤマツツジが淡い紅紫色をみせてくれ、ハルゼミの鳴き声は、ネムの花とともに、けだるく、まるで子守歌である。

蝶類も多彩である。アサギマダラが尾根筋の上昇風に舞い、オトコヨシやヒヨドリバナの花に一服する。ヒヨドシチョウやコムラサキもバレリーナの早いリズムにある。越



冬から目覚めたテングチョウは、至る所で飛び交う。夏の草むらではモンキチョウにカラスアゲハ、アオスジアゲハやナガサキアゲハと、モンキアゲハが忙しく、花々の蜜を吸っている。クサギやサンショウ、ユズにカラタチの花は大型蝶のレストランである。

珍しいことに、イシガキチョウをまれに見ることがある。度重なる台風の気流に乗ってやってきたものだろうか。

昆虫類の住まいの中でもクヌギやコナラの林は子どもたちにとって甲虫類のメッカである。カブトムシをはじめ、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタと、ヒラタクワガタ、コクワガタが代表で、オオクワガタは見かけなくなった。ブンブンの仲間は至る所で見かける。

夏から秋にかけての草原は、エンマコオロギ、ツヅレサセコオロギとオカメコオロギやウマオイ、カンタン、スズムシにクサヒバリ、時にはクツワムシが大オーケストラのメンバーである。キリギリスはカマキリたちとススキの茂みに幅をきかせている。

トンボの仲間はオニヤンマ、ギンヤンマをはじめ、モノサシトンボにコオニヤンマやチョウトンボ、ヨツボシトンボが、またナツアカネやアキアカネにショウジョウトンボは秋の田のうえを、時には注意すべきはオツネトンボが田んぼのトタンやブリキ屋根の小舎に冬を越している。屋根裏の輻射熱に暖をとっているのであろう。

宇治田原町では、ここ 20 年近く教育委員会とエコパートナーシップうじたわらによる小・中学生と、田原川の水質調査や水棲生物の調査を行ってきている。

京都府の自然 200 選にある「ゲンジボタルの名所」として、ホタルの幼虫が生息でき、その餌となるカワニナをはじめとする淡水貝類の繁殖へとつなげる水質保全につとめている。その課題となる問題はゴミのポイ捨てにある。

水棲生物には、スジエビとヌマエビが多く、カワカゲロウの数種の幼虫、コオニヤンマやカワトンボの幼虫も豊富である。

魚類では、オイカワ、カワムツにアユ、アブラハヤ、ドンコにヨシノボリは常にあり、残念なことにはシマドジョウにスジシマドジョウとアカザは見かけなくなった。ニホンメダカやカダヤシは水流のわんど水域に生息しているが、昆虫のゲンゴロウやタイコウチはほとんど見かけなくなってしまった。

は虫類に調査の結果を示すと、ヘビ類のタカチホヘビ、ヒバカリ、ジムグリなどの絶滅要注目種が、毎年見つかっている。

両生類のカスミサンショウウオとヒダサンショウウオは、支川の峡谷に生息していることは注目に値する。

カエルの仲間ではダルマガエル、ニホンアカガエルやツチガエル、モリアオガエルとシュレーゲルアオガエルの存在は大きい。

ほ乳類では、ニホンジカ、ニホンイノシシとニホンザルを代表として、ホンドギツネにホンドタヌキとニホンイタチはうろうろしている。ニホンリスやムササビは、森林や鎮守の森で観察でき、ノウサギは茶園に、ハタネズミやカヤネズミは田畑や河川敷のアシの茂みに生息している。

今や、アライグマやヌートリアの外来種の数量の多きには困っている。

菌類ではアカマツ林を好むマツタケは希少価値であるが、ハタケシメジやムラサキシメジとスギヒラタケ、エノキタケは身近にある。

山中で驚くことは、ツチアケビとギンリョウソウに出くわしたときである。アリガタイ。

さて、植物について、もう少し追記してみたい。絶滅に瀕するカタクリとクマガイソウは先に述べたが、さらにミヤコミズやハシリドコロも同位である。

2014年にDNA分析の結果、クマツヅラ科であったカリガネソウはシソ科に変わったが、町内では大きく分けて2カ所の山林谷に繁殖していることはありがたい。

センブリやハルリンドウやランの仲間は人の手による乱獲で、絶滅寸前にある。過去には町内広くの里山谷にあったサワオグルマはもう一カ所のみになってしまった。保全の働きに手をさしのべておきたい。ワレモコウやツリフネソウとフシグロセンノウも大切に残してゆきたい。

終わりに宇治田原町内の自然と共生する生物たちの調査は今後も続けられていくが、平和堂様の「夏原グラント」を拝受できたことは調査の上で実に役立ち、活用できたことは感謝の念に深く厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。(阪本)



サワオグルマ（左）と外来昆虫のヒラズゲンセイ（右）



夏原グラント助成金贈呈式で夏原平和理事長（中央）と

### 自然環境について学べる施設

- ・ 国立科学博物館（東京都台東区上野公園）
- ・ 京都府立植物園（京都府左京区）
- ・ 京（みやこ）エコロジーセンター（京都市環境保全活動センター）（京都市伏見区）
- ・ 京都市動物園（京都市東山区）
- ・ 滋賀県立琵琶湖博物館（滋賀県草津市）
- ・ 大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区 長居公園）
- ・ 兵庫県立人と自然の博物館（兵庫県三田市）
- ・ 橿原市昆虫館（奈良県橿原市）
- ・ 箕面公園昆虫館（大阪府箕面市）
- ・ 益富地学会館石ふしぎ博物館（京都市上京区）
- ・ 京都水族館（京都市下京区 梅小路公園）
- ・ 京都大学総合博物館（京都市左京区）

### 関連情報サイト

- ・ 環境省（自然環境・生物多様性）
- ・ 京都府（環境部自然環境保全課）
- ・ 京都府レッドデータブック情報（京都府）
- ・ 京都府外来生物情報
- ・ 宇治田原町（「環境衛生」→「自然・動物」→「宇治田原町の野生生物」）
- ・ こどもエコクラブ（公益財団法人日本環境協会）
- ・ 国立環境研究所
- ・ 生物多様性センター（環境省自然環境局）
- ・ 日本自然保護協会
- ・ WWF ジャパン（世界自然保護基金）
- ・ 図鑑.jp（インターネット生物図鑑読み放題サイト）
- ・ 夏原グラント（公益財団法人平和堂財団）
- ・ エコパートナーシップうじたわら facebook ページ

### 参考文献・資料

- ・ 宇治田原町史第1巻、第2巻、同参考資料輯、同資料編、文化財百選
- ・ 宇治田原町埋蔵文化財報告書（遺跡地図、山瀧寺跡）
- ・ 宇治田原町レッドデータブック
- ・ 京都府レッドデータブック 2015
- ・ 宇治田原歴史の道全5種、宇治田原のお茶（観光パンフレット）

## 自然とふれあうために

今回の冊子には宇治田原町内の野生生物や銘木、地質、環境について紹介しているが、そのすべてを網羅することはできていない。宇治田原の、またその周辺の自然環境についてより深く知りたいと思う場合は、2006年発行の「宇治田原町レッドデータブック」や2015年発行の「京都府レッドデータブック」を参照してもらいたい。いずれも町立図書館に備えられている他、宇治田原町や京都府のHPに掲載されているので、ネットにさえつながればどこでも見ることができる。

ネット環境の発達で、図書館や書店に行かなければ見ることができなかった専門書やその他の書籍を気軽に見られるようになり、また、SNSでは身近な場所で見つけた野生生物の情報が多数アップされている。そうやって手軽に情報収集できるようになった一方で、こんな山菜を食べたとか、珍しいものを見つけたという情報があふれ、競うように乱獲して「いいね」が集まることに酔いしれたり、誤同定で中毒するようなことが発生している。

縄文時代より以前から、人は身近な野生生物を食糧として利用し、長い年月の中でおいしいものを見つけ、中毒で犠牲者が出たりしながら知識を積み重ねてきた。少し前までは地域によっては不足する食糧を補うために山野草を積極的に利用することはあったが、最近は伝統文化として、または趣味として自然の恵みを味わうことが多い。たしかに味覚の面から接することも自然とのふれあいの楽しみではあるが、自然は必ずしも人間にとってやさしいものではなく、時に牙をむいてくる。自然とふれあうために、ましてや、口に入れるとなれば、ある程度の知識を備えておく必要がある。

よく中毒例のあるものでは、河川敷など身近な場所に生えているノビルとそれによく似た植物である。ニラは栽培されているだけでなく、種が飛んで野生化しているものが見られる。それらと誤食されることがあるのがスイセンで、葉が大きいものは間違えにくいと思われるが、小さいものもある。実際、ニラなどとの誤食で死亡事故が発生している。また、田原川河川敷には春先に青紫の花を咲かせるムスカリも生えていて、葉だけだとノビルなどに似ている。山菜では他にハシリドコロやトリカブトなど、致死的な有毒種も存在する。

植物だけでなく、きのこ類でも、毎年中毒の発生が報じられ、中には知識が不十分な人が採取した有毒種が道の駅などで販売されたり、他人に配布して中毒が発生している。菌類は不明種がとても多いことと、肉眼的に区別することが困難なものが多い。また、以前は食用として利用されていたが、2004年に脳症で死亡する人が相次いでいたことが判明し、以後、有毒種として注意喚起されているスギヒラタケのような例もある。

野生動物にしても、スズメバチやマムシのように刺されたり咬まれたりすると場合によっては命にかかわるものだけではなく、病原菌や寄生虫を持っているものが多い。

野生生物は過度にふれあったり、口にするとすることは慎重に行わなければならない。

宇治田原は化石が見られるということで有名だが、道路沿いの露頭をむやみに割って化石を採取しようとするあまり、露頭がえぐれてオーバーハングし、事故が発生する危険性が高まる。実際、大きな落石が発生したこともある。

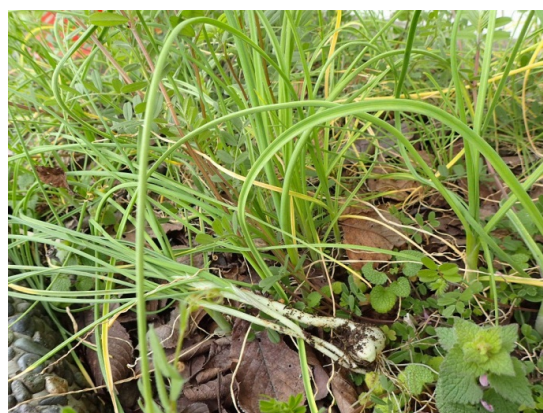
恐ろしげな話ばかりを並べたが、恐れてばかりいては自然とふれあうことも、自然の恵みを享受することもできない。知識を持って無用なリスクを回避することで楽しく自然とふれあうことは可能である。

宇治田原町内では、主に住民向けではあるが、環境学習などが開催され、身近な自然環境について学ぶことができる。また、農道や林道などを歩けば様々な生き物を観察することができる。本来の目的は農林業の作業効率化のために整備されたものだが、作業に支障のない範囲で利用することは許されるだろう。ただし、これはどこにでもあてはまることだが、どこかの土地は自分の所有地を除けば、誰か他の人の所有地であるため、無断で過度に採集することは慎まなければならない。ましてや、採集品を無断で商売に利用するようなことはあってはならない。

山野草を自宅に持ち帰って栽培し、楽しみたいと思うこともあるかもしれないが、共生する菌類や植物との関係や特殊な環境など、他の場所に移したり環境を変化させると生きられないものもあるため、自然にあるものは自然の状態で鑑賞するようにしたい。



スイセンなど（左）とニラ（右）



ムスカリ（左）とノビル（右）

## 編集後記

宇治田原町レッドデータブックが発行されたのは、エコパートナーの設立前のことであり、エコパートナーとして町内の自然環境に関する調査及びその成果物を製作するのは今回がはじめてのことである。2006年当時は町内及び近隣地域で活動する在野の研究者や活動家の手で調査や資料のとりまとめを行ったそうだが、かなりの労力と時間を要したと聞いている。広い町内を長期間にわたって調査するのは簡単なことではない。また、記録した野生生物等が何者であるのか、それを同定するには多数の資料や専門的知識が必要となる。そのうえで完成されたレッドデータブックは宇治田原町にとっては大きな財産といえるもので、13年が経過した今もその価値は色あせていない。

今回の調査活動はそのレッドデータブックを下敷きとしたからこそ可能となったものであり、いちからスタートするには相当な覚悟が必要であったろう。一方で、当時と異なるのは、インターネット環境の発達で様々な情報を容易に収集できること、この冊子のようにネット経由でデータを送信すれば安価に印刷製本が可能になったことなどがあげられる。ただし、ネットの情報は誰でも手軽に発信できるため、無数の情報から適切と思われるものを選別しなければならない。そのためには、図鑑等の専門書にあたることや、各種研修会や自然環境に関する観察会・学習会に参加して知識や体験を深める必要がある。

今回の調査活動を実施するにあたり、「協働による～」と掲げたように、エコパートナーだけではなく、住民や事業者、各方面との情報交換や協力関係の中で実施することを目標としていたが、実際には当初思い描いていたほどの共同作業ができなかったのが実情である。また、資料の検討や保存に関して、各地の専門機関や施設にも協力を求めることもできていない。調査で得られた資料は後日検証が可能な状態で保存されるのが理想であるが、京都府内には中心的役割を果たす自然史系博物館施設がないのが現状である。京都府が生物多様性地域戦略で構想している施設の実現に期待したい。

3年間調査を実施したとはいえ、年間を通じてそれに充てられた日数は少ない。限られた中で町内の隅々まで調査できたわけではない。しかし、レッドデータブックの発行から十数年が経過し、町内の自然環境についてその現状を一部でも確認できたことには一定の意義があると思う。今後も調査はできるかぎり継続し、新しく得られた知見をアップデートしていきたい。今回の冊子もデータをネットで掲載するため、アップデートしたものはこまめに情報を更新したいと考える。

最後に、今回の調査活動にご支援いただいた平和堂財団、エコパートナー会員、その他ご協力いただいた皆様に深く感謝の意を表したい。



宇治田原町の自然環境  
2019（平成31）年3月発行  
エコパートナーシップうじたわら



この事業は平和堂財団の夏原グラント助成金を受け実施したものです